
MUV-LUV ALTERNATIVE ACE

犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M U V - L U V A L T E R N A T I V E A C E

【Nコード】

N 7 9 3 1 0

【作者名】

犬

【あらすじ】

極めて遠く、限りなく近い世界。

少しの違いが大きくなずれになり、物語を狂わせる、可能性の世界。
そこで足掻く英雄になろうとする男の物語。

第1話「始まり、始まり。」（前書き）

注意書き

この話は、M U V・L U V A L T E R N A T I V Eでオリジナル主人公が暴れる物語です。

キャラクターが上手く表現できない可能性などもあり、一部キャラクターがオリ化しています。

それでもOKな方はご覧ください。

第1話「始まり、始まり。」

それは別の世界の物語。

それはありえないはずの物語。

だが、在りえない事で在りえる、限りなく近く、限りなく遠い世界。

そこで、運命に抵抗しようとする男が居た。

2001年2月11日午前11時20分、防衛基準体勢^{デフコン}2が発令。それに伴い帝国陸軍総司令部は本土防衛軍第12師団所属、神田少佐以下『鋼の槍』連隊がの出撃を決定。

そしてその部隊の援護中隊として我々も出撃となった。

しかし、BETAの攻勢激しく、徐々に押され、敗走寸前まで追い込まれた。

だが、のちの面制圧で攻勢に打って出ると、BETAを全滅したはずだった。

その直後にセンサーが振り切れるほどのBETAが出現した。

そして、我々とBETAの決戦が始まった。

2001年2月11日、相馬原基地近郊

side・黒川

「落ちろ。」

俺、黒川敏行大尉は92式戦術歩行戦闘機・改修型『陽炎・改』の右腕の87式突撃砲の36mm突撃機関砲を乱射する。

高速で射出されるHVAP弾（劣化ウラン貫通芯入り高速徹甲弾）が要撃級に食い込む。

息絶えたのか、その場に崩れるように倒れる。

「ハルバート01よりハウンド01、そちらの戦力の損耗率は？」

俺は親友であり、帝都本土防衛軍第12師団『スティルランス鋼の槍』連隊の三席に当たる七瀬幹也（大尉）に状況を尋ねる。

『こちらの機体の損耗率は15%らしい、そっちは？』

「俺の部隊はさっきの奇襲で全滅だ。」

俺は戦車級を36mmで掃討し、左腕の74式近接戦闘長刀で要撃級を斬り殺す。

しかし耐久限界が来たのか、長刀が根元から折れる。

『他の部隊は？』

長刀を戦車級の群れに投げつけて圧死させ、新しい長刀を抜く。

「情報が錯綜している。」

『いよいよ手詰まりだな。』

言いながら幹也の77式戦術歩行戦闘機『撃震』が87式突撃砲2丁の36mmが小型種を挽肉にし、要撃級を蜂の巣にしていく。

「ああって、チェックシックス!!」

俺は幹也の背後に居た要撃級を120mm滑空砲で正確に狙い撃つ。APCBCHE弾（劣化ウラン貫通芯入り仮帽付被帽徹甲榴弾）により一撃で撃破する。

「ミス1。」

その瞬間、幹也の87式の銃口がこちらを向き。

「おう?」

120mm滑空砲が火を噴く。

弾は俺の陽炎・改の横を通り抜け、後ろに居た要撃級に命中する。

『チェックシックス。』

幹也が不敵に笑う。

「言ってる。」

などと言いあっていると周りをBETAが囲み始める。

『ハルバート01より各機へ、現在戦闘可能な機体は何機だ?』

『全機、戦闘続行可能です。ですが機体の損耗率が徐々に上がり始めています。』

副官の中尉が真面目に答える。流石全員百戦錬磨の強兵。

「お話中御免だけど、正面から団体様。要撃級と戦車級とその他諸々。」

『全機、鶴翼の陣にて対処。』

「了解。じゃあ、一通り掃討するか。」

『そうだな。全機、攻撃開始。』

『『了解!!』』』

合計13丁の36mm突撃機関砲の一斉掃射により肉塊に変わっていくBETA。

突撃級がないのが幸いだ、それでも掃射しても減らないBETAの物量作戦に疲労が蓄積し始める。

『ハルバート01よりハウンド01、これが最後の弾倉だ。』

「そうか。こつちもとうとう長刀の予備も折れた。120mmは弾切れ。36mmも残弾僅かだ。」

それと同時に機体の疲労も限界に達し始めていた。

『くろつち、それと七瀬大尉、無事?』

『生きてる、二人とも?』

「亜矢とあきらか。」

突然、大咲亜矢の94式戦術歩行戦闘機『不知火』全12機と八神あきららの撃震全10機がこちらに向かって来る。

両隊の戦術機は少しばかり損傷しているが、元気そうだ。

だが、一部戦術機が運んでいるコンテナが気になるが。

「部下は？」

『あつきーの方がさっきの奇襲で2機ほどやられたわ。ところで、そっちの状況は？』

何故かしつこく尋ねてくる大咲。だが、少しばかり気持ちに余裕が出来てきた。

「生きているし無事だが、弾不足だ。」

87式の残弾は36mmが500を切って120mmは0。長刀はこの折れた1本だけ、と言った状態だ。」

『こちらは大して変わらない。お前たちは？』

『こちらも殆ど一緒です。』

幹也も部隊も同様で、かなりギリギリらしい。

『これお土産ね。』

そう言つて亜矢達が置いたのは、コンテナだ。

「これは？」

『補給物資よ。』

その瞬間、幹也の部隊から歓声上がる。

「地獄に仏とは正にこの事だな。」

『そうだな。』

幹也と二人、しみじみという。

『この大咲お姉さんに感謝しなさい。』

「するさ。ところで亜矢、盾（92式多目的追加装甲）は？」

『要撃級にあげたわ。彼、欲しがってたみたいだし。』

「豪快だな。」

『全くだ。』

『そうね。』

他愛も無い会話をしながら長刀1本と87式の弾倉を、幹也は87式の全弾倉と予備弾倉をそれぞれ補給する。

ほかの戦術機も装備の差こそあるが、大体同じように補給していく。

『状況は？』

「不利だな。」

あきらの問いに簡潔に答える。

『ま、確かにね。地下からの突発的な奇襲とそれによる混乱。まるで戦術ね。』

亜矢が相変わらず鋭いことを言う。

『で、どうするんだ？』

幹也の問いに少し考える。

「陣形は鶴翼の陣、先頭を幹也、左翼に亜矢、右翼にあきらを当てる。俺は数の少ない八神中隊に入る。」

『了解!!』『了解!!』
『全機、敵の足を止める。弾はまだあるから気にするな。』
『了解!!』『了解!!』

幹也の部隊が弾幕を張り始める。12丁の36mmから発射されるウラン弾がBETAを肉塊に変えていく。

『大咲隊全機へ、こちら弾幕を張れ。奴らの死体で壁を作り足止めをしろ。』

『イエス、マム。』

亜矢の部隊も攻撃を開始する。

『八神隊は七瀬隊や大咲隊の掃射後の弾倉交換の援護をします。』
『了解。』

あきらは慎重に状況を見ている。

『敏行大尉もよろしいですね。』
『委細承知。』

ほぼ状況に合わせた戦術を取ったつもりだが、不安も残る。
(問題は、終わりの見えないところだな。さて、どこまで持つか。)

『ハルバート04、弾薬残り僅か!!』
『ハルバート06、弾切れ。補給します。』

徐々に弾薬が心許なくなってくる。

終わりの見えない戦闘に徐々に焦りが生まれてくる。

『きりがないわ。』

『そうね。殺しても殺しても湧いてくる。』

亜矢とあきらが焦りだす。どうやら本当に切羽詰っているようだ。すると俺たちは戦場で最も目にしたくない存在を見る。それは見るだけでもおぞましい巨体。

蜂を連想させる戦場で最も出会いたくない存在。

「要塞級が4!？」

『く、このタイミングでか!？』

『この糞忙しいときに!!』

『邪魔なのが来た。』

口々に皮肉や文句を垂れる。

「全機、120mmに弾がある奴は優先して要塞級を狙え!!」

俺たちは突撃砲を構え。

そして別方向から120mmが飛んでくる。

「えっ？」

『生きているか、七瀬、黒川!!』

直後に神田少佐と日高大尉のバストアップが映る。

『神田少佐、日高大尉。』

「神田少佐、日高姐さん!!」

『どう、いいタイミングだったでしょ?』

「姐さん、惚れました。あまりにもにくい演出です。」

俺は戦術機の親指を立てて答える。

『ありがとう。』

俺は即座にCPに通信を取る。

「ハウンド01よりCPへ報告、提示した座標に支援砲撃を行ってくれ。」

『CPよりハウンド01、それは越権行為になります。』

「構わない。ここが勝負所なんだ。頼む。」

『……CP、了解。』

CPの神谷少尉の通信を確認すると、神田少佐と日高大尉に回線を開く。

『どうした？』

『どうしたの？』

神田少佐と日高大尉のバスタップが映る。

「現在、BETAが密集しているこのポイントに支援砲撃をし、時間を稼ぎます。」

『……………。』

二人が黙る。そのポイントは確かにBETAの数が多いが、先ほどまで光線級が居た所。それを理解しているのか苦い顔をしている。

「日高大尉！！神田少佐！！」

『分かってるって。大咲中隊、神田中隊の援護に行くよ。』
『『イエス、ママ。』』』

すると、地下から激しい揺れが襲う。

「全機、緊急跳躍！下からだ！」

そして多くはないBETAが現れる。

「目視1000。早急に潰せ！」

だがあきらの撃震だけが動かない。

「あきら、どうした！？」

『敏行、御免。』

「あきら？」

一瞬、なぜ謝っているのか分からなかった。

『跳躍ユニットが作動しないわ。』

「な！？」

その瞬間、八神の撃震が要撃級からの攻撃を受けて後ろに吹き飛ぶ。

「あきらー！！」

『あっきー！！』

「ハウンド01、フォックス03。」

『クーガー01、フォックス03。』

俺は全弾使い切る気持ちで36mmのトリガーを引き、八神の周辺

に居る要撃級や戦車級を肉塊に変えていく。
大咲が援護をする。

『ハルバート各機、フォックス03。』
『『了解。』』』

刹那、七瀬の部隊からも支援を貰い、掃討に成功する。

「あきら、大丈夫か!？」

バストアップが映る。そこには左眉から出血している八神が映った。

『問題ないわ。破片で眉毛を切ったくらいよ。大袈裟過ぎるわ。』
『素直じゃないんだから。』

「確かに。だが、あいつなりの照れ隠しだろう。」

『そつだよね、照れ隠し照れ隠し。』
『聞こえてる。』

大咲と二人で口々に八神を弄る。

『お喋りはそこまでだ、三人とも。周囲を警戒しろ。』
『『了解。』』』

神田少佐に釘を刺されたので真面目に周囲警戒を始める。

『……静か、ですね。』
『神田少佐、帝国参謀本部は何か言ってますんか?』
『現状維持だそつだ。』

対策か何かを会議中なのだろうと考えたい。

『現状、ねえ。現状がどんなものなのか上層部の人たちは見ないのかしら？』

「大尉、現在の発言は上官侮辱罪に当たる可能性がありますので自重してください。」

日高大尉に進言する。

『あら、ごめんなさい。』

だが全く謝る気のなさそうな様子の日高大尉に少し呆れる。

『でもさ、無能は嫌だよねえ、あつきー。』

『そうね。無能の下に就く位なら何処かに左遷された方がマシね。』

「なあ、二人とも。本当に頼むからその危険な会話を俺の近くでしないでくれ。飛び火は嫌だぞ。」

少し泣きそうな声で二人に釘を刺す。

『了解（了解）』』

（絶対、口だけだな。）

瞬時に悟った。

『帝国参謀本部より入電。』

唐突に神谷少尉が映ったので表情を引き締める。

『本日16：49を以ってBETA掃討を宣言。デフコン01より02へ移行。なお、鋼の槍連隊は引き続き警戒を続けよ、との事。』

理不尽な命令だが、任務と割り切る。

『神田隊、了解。』

『日高隊、了解。』

『七瀬隊、了解。』

『黒川隊、了解。』

『大咲隊、了解。じゃあ皆さん、基地でまた会いましょう。』

『八神隊、了解。では、失礼します。』

亜矢とあきらの部隊が撤退していく。

『敏行、どうして俺たちだけが残されたと思う？』

「相馬原の守備隊は壊滅したらしい。その埋め合わせだろう。」
『なるほど。』

答えると、何処か納得した顔をする幹也。

『迷惑ね。』

「そうですね。」

日高大尉の言葉に心底同意する。

数分後、交替の部隊の到着と同時に俺達も後退するのであった。

そして、この戦いが全ての始まりの序章になるとは思わなかった。

第1話「始まり、始まり。」（後書き）

犬「犬と。」

黒「主人公の。」

犬・黒「裏話!!」

犬「さて、やってしまいました、このお話の投稿。」

黒「1つ良いか?。」

犬「何?」

黒「前のはどうした?」

犬「黒歴史として葬り去りました（・|・:）」

黒「良いのかよ、それで。（・|・:）」

犬「話を詰めたのが原因ですねorz」

黒「で、これはどうするんだ?」

犬「もう大雑把に帝国激動編、横浜鎮魂歌、最終決戦と分けます。」

黒「ふむふむ。」

犬「最低でも一章20〇の予定にします。」

黒「なるほど。」

犬「あと、君らの紹介と裏話はプロフィールに書くから待ってくれ。」

「

黒「了解。」

犬「次回を待て。では。（・|・:）ノシ」

第2話「計画、始動」(前書き)

さて、更新したのは良いが、当分の間は武ちゃんが空気。
どうしようかな。

第2話「計画、始動」

報告書

2001年2月12日作成

内容

帝国軍本土防衛軍第12師団所属『鋼の槍』連隊外接仮想敵部隊『黒き狼隊』隊長、黒川敏行大尉が去る2月11日の相馬原基地防衛戦に於ける数々の越権行為、並びに命令違反の疑いに関する報告書。

容疑

命令違反、越権行為

調査結果

確かに他部隊の隊員に対して、越権行為とも取れる命令を下したのは事実ですが、それは当時の現場の判断であり、これが一概に悪いとは言えず、また支援砲撃の要請は、必要であったと言われれば納得してしまう状況下であったとも言えます。

また、同連隊の多数の隊員から黒川敏行大尉を無罪に、との声が多数あり、彼がどれだけ部隊の生存に尽力を尽くしたのかが伺えます。

この様な状況を鑑み、黒川敏行大尉には無罪、または2、3日の営倉入りが妥当と思われます。

報告者

帝国情報省外務二課 剛田 城二少尉

side・剛田

「ふう〜。」

俺は入力していたデータをプリントし『提出物』と書かれた茶封筒に入れ、封をする。

「しかし、余程彼を容疑者扱いしたいらしいな。」

たったこれだけの事を理由に彼を処分しようとしているのだ、何か裏があると俺の直感が言う。

「ちょっと調べてみますか。」

好奇心半分、職業病半分の気持ちで席を立つ。

「何はともあれまずは書類だな。」

俺の上司の元上司である後藤副司令に茶封筒を渡す。

「うん、ご苦労さん。わざわざ悪いね、これだけの事を頼んじゃつて。」

「いえ、職務ですから。」

淡泊に言つと、ニヤツと笑う後藤副司令。

「所で、左近は元気？」

「ええ。今はアラスカに鮭を釣りに行ってます。」

そう言いながら課長がサーモン釣りをしている姿を想像する。

(……似合わないな。)

「そりゃご苦労さん。おおよそ、雌狐だろうけどね。狙いは99式のブラックボックスかな。」

ソ連も余程あれが欲しいんだろうね。来るべき人対人との戦いに。アメリカとの戦いに。

まあ、取らぬ狸の皮算用にならなければ良いけどね。」

相変わらず驚くほど情報分析が早い。

たったこれだけの情報でそれだけの物を導き出すとは。

「流石ですね。」

「いやいや、情報さえあればこれ位、俺でも分かるよ。」

それでも、この人は桁が違うと思う。

「では、失礼します。」

「うん。」

そう言うと俺は退室する。

あ、あの事訊くの忘れた。
ま、良いか。

side・?????

……時間を遡り、2001年1月29日、帝国国防省 第六会議室
私は巖谷榮二中佐の説明の後、拳手をする。

「……若輩者の小官の愚策、お耳汚しで無ければご視聴下さい。」
「許可しよう。」

畑違いの私の意見を許可した議長のことを少し疑いながら席を立つ。

「やはり米国の培ってきた戦術機ノウハウは我々を圧倒しており、
これを考慮した上で、私は皆様の手元に置かれております計画をX
F」と並列で行いたいと思います。」

そして手元の資料を見た巖谷中佐を除いた全員が驚きを隠せない表情をしている。

「この計画は時間が掛かりますが、それでも国内戦術機の明暗を決めるもの、と私は考えております。」

「「「……………」」」

流石に議場が静寂に包まれる。

確かに先ほどから口うるさく『国産』にこだわって来た奴らが急に
この計画を受け入れられるはずが無いことは解っていたので、予備
の手を出す。

「……戦国時代に、種子島に外国から鉄砲が伝えられました。」
「「「……………」」」

議員達が黙っているが、注意しながら喋る。

「種子島の鍛冶師はそれを分解し、構造を理解して、それを上回る鉄砲の製作に漕ぎ着けました。」

「我々はその血を引き継いでいる者達です。例え諸外国の戦術機を模倣して文句が出てきても無視すれば良いではありませんか」

「それが結果的に我々の力になるのならば。」

「……………」

議員達の静寂は続くが、私はそこで礼をする。

「若輩者の小官の意見を聞き届けて頂き、感謝いたします。」

そして私は着席した。

2001年2月16日

side・黒川

相馬原基地防衛戦から数日後、突如休暇を与えられた俺たち鋼の槍連隊。

部隊の再編や基地の修理、それに人員補充などでかなりの時間を消費するからだ。

そして俺は幹也の部屋で秘蔵の芋焼酎を飲んでいた。

「幹也、暇だ。」

「そうか？俺は書類整理に忙しいぞ。」

机に座って幹也は書類を処理している。

しかも書類は微妙に山になっており、当分終わる気配はなさそうだ。

「俺の部隊は最後の奇襲で全滅、当分は休業だ。」

「そうか。」

おかげで今の俺の部隊は俺以外は誰も居ない。

「そう言えば幹也の所、撃震の代わりに何が来るんだ？」

ふと思った疑問を口に出す。

幹也の大隊の損耗率は鋼の槍連隊の中でも最も酷く、他の中隊と比べても断トツだったらしい。

おかげでオーバーホールするより別の戦術機を取り寄せた方が安く済む為、新しいのが配備されることになったらしい。

「94式戦術歩行戦闘機、不知火だ。」

「それは羨ましい。」

正直な感想を述べる。

不知火は数も少なく配備されているのは優先的に帝都本土防衛軍や重要度の高い部隊に配備されている。

その為、俺たち帝国軍人には憧れの存在と言える。

（そう言えば、首都防衛の一翼を担っている第5師団の大咲も不知火だったな。）

「だが機種転換だから当分は訓練だ。その書類を書くと思うと今から胃が痛い。」

そう言いながら幹也が胃の辺りを押さえる。

「ご愁傷様。」

『黒川敏行大尉、七瀬幹也大尉、直ちに副司令室までお越しく下さい。繰り返します……。』

突如として放送が流れ、呼び出しを受ける。

「呼び出しか。」

「らしいな。」

首を傾げる俺に幹也が立ち上がる。

「さて、どんな無茶を押し付けられることやら。」

「そうだな。」

溜め息をつきながら幹也と共に副司令室に向かう。

「黒川敏行大尉、出頭しました。」

「七瀬幹也大尉、出頭しました。」

ノックをして扉を開けて敬礼をする。

「ご苦労さん。堅苦しいのは抜きで、まあ、座ってくれ二人とも。」

「了解。」

促されたのでとりあえず、俺と幹也はソファに座る。

目の前にはこの基地の副司令であり、鋼の槍連隊総指揮官である後藤喜一副司令が座っていた。

風貌こそ中年のおじさんだが、かつては周りから『剃刀後藤』や『昼行灯』と呼ばれ恐れられていた元城内省外務二課課長。

だが、何故この鋼の槍連隊の連隊長兼副司令になったのかは未だに不明だが。

「すまないが机の上の資料を見てくれ。」

そう言われ、机の上にあった茶封筒を開けて中身を取り出す。とそこに書かれていた文字に目が行く。

「次期主力戦術機開発計画？」

「何ですか、これは？」

「迫り来るBETAとの戦いに於いて、戦術機は戦術の中核を成している。」

それこそハイヴ内における戦闘は戦術機のみが活躍しているといっても過言ではない。

だが、我が国の不知火は開発期間を切り詰めた上にノウハウの無いまま創り上げられた不遇の戦術機。

その不知火に替わって踊り出るのがこの次期主力戦術機だ。」

「しかし、国内派はこれを容認するのですか？」

彼らは石頭も石頭。鉄パイプで殴っても変わらない無い生粋の国粋主義者達。

それをどうやって説き伏せるんですか？」

聞いた人間次第では何か言われそうなぎりぎりの言い方で尋ねる。

「あ、それはもう終わってる。」

「「は？」」

何事も無い様な言い方に呆氣に取られる俺と幹也。

「やっぱりね、脱税はいけないよね、脱税は。真面目にしないとどこで怪我するか分からないしね。」

「そう、ですか。」

「はあ。」

俺と幹也は呆れて物も言えない。

「要するに『表沙汰にされたくなければ協力しろ』って事ですね。」

俺が簡潔に纏める。

「まあ、そう言う事。と、言う訳で。」

「どんな訳ですか？」

つい勢いで揚げ足を取ってしまう。

「気にしない。黒川敏行大尉か七瀬幹也大尉、そのどちらかがこの計画の実働隊隊長を勤めよ。これは命令だ。」

口調は変わらないが雰囲気が変わる。そしてその気配に俺も幹也も身を締める。

「でしたら、自分は無理です。自分には鋼の槍連隊の大隊長としての勤めがあります。」

「そうだな。後藤副司令、自分が実働隊隊長になります。」

幹也の言葉に頷きながら立候補する。

「分かった。ベースとなる機体の搬入や隊員の選抜は私がやるから

お前さんは待機している。」

「「はっ。」」

立ち上がり幹也と共に敬礼する。

「じゃ、解散。」

「失礼しました。」

そう言うのと俺達は部屋から出て行く。

次の日、俺は再び副司令室に呼ばれた。

（えらく早いな、元から決まっていたのか？）

下種な勘繰りかもしれないが、余りにも早いので予定調和に思えてくる。

「これが選定した隊員。とりあえず新人も居るけど虎の穴に放り込むから問題ないだろう。」

手渡されたリストを見ると確かに新人が多い。しかも何故か俺の義娘まで居る。

「それとこれね。」

副司令が机の引き出しから出されたのは小さな木の箱だ。開けるとそこには階級証が入っていた。

「少佐の階級証ですか。」

「昇進。一応俺の直轄の部隊だから最低限、少佐の権限を持ってもらわないと困るんだよ。」

「正直、大尉が良いです。」

とりあえず断ってみる。

「でも、認められないんだよね。諦める。」

だが駄目だった。仕方がないので階級証の入った箱を受け取り、少佐の階級証を胸につける。

正直、階級が上がるたびに責任という目に見えない重さが辛い。

「ところでさ、この子達、引き取らない？」

唐突に話が変わる。そして副司令が今度は数枚の書類を出す。

それらを見てみると少女が二人映っている写真と説明と思われるものが書かれていた。

「クリスカ・ビャーチェノワ少尉とイーニア・シエスチナ少尉？」

「そう。彼女達は前から保護していた子だね。晴れてお前さんの娘になる事となった。」

「頭、大丈夫ですか？」

後藤副司令が気でも触れたのかと、心配になる。

「正気だぞ。それに、嫌なら施設送りにすればいいんだし。」

「……。」

俺は無言で副司令を睨む。感情無しの睨みは、よほどの人間で無い限りは怯えるか竦む。

「睨むなよ。彼女達を引き取るのはお前さん次第だし。」

だが『剃刀』の二つ名は伊達ではないらしく、効果は皆無らしい。
このあたりは年季の差だろう。

元帝国情報省外務二課課長の肩書きは伊達ではない。
自己完結する。

「……了解。その子達を引き取りましょう。」

子供は好きだし、二人くらいならまだ養える。

それに、あえて虎穴に入るのも一興。何が出るかは楽しみだが。

「無理を言つてすまないな。」

「はいはい、失礼します。」

白々しい嘘だと思いつつも、無視して退出する。

2001年2月24日

side・黒川

基地外から軍用トラックが向かってくる。

「来たか。」

軍用トラックから二人の少女が降りてくる。

「クリスカ・ビャーチェノワ少尉とイーニア・シェスチナ少尉だな。」

俺が声をかけると、イーニア少尉がクリスカ少尉の後ろに隠れる。

(……やっぱり、6割が白髪のままなのが原因か？それともオッドアイが原因か？)

「はっ、クリスカ・ビャーチェノワ少尉、イーニア・シエスチナ少尉、着任しました。」

声が聞こえたので思考を中断し彼女たちを見る。

「了解した。俺が今日から君達の上官になる黒川敏行少佐だ。楽にしていぞ。」

「はっ、よろしく願います。」

「おねがいします。」

クリスカ少尉はまさしくあの頃のあの子の様だ。
だから、笑みがこみ上げそうになる

「分かった。では早速だが君たちの親権は私が預かる事となった。
つまり、今日から君たちの父親になる。」

「はっ？そ、それは!？」

「そして、今から君たちをクリスカ、イーニアと呼ぶ。」

元々苗字で呼ぶのがあまり好きじゃない。苗字はその人間の生まれを指しており、その人間個人を表していないからだ。

「それに、俺は基本的に相手の名前で呼び合っている。問題はない。」

「でしたら……。」

「命令だ。」

有無を言わせぬ権限を発動する。と、イーニア少尉が俺を見ていることに気付く。

「ん、どうした？」

「……おとうさんでいい？」

「イーニア！？」

つい顔が綻んでしまう。

「そうだな。そう呼んでくれれば良い。ま、家にはもう一人お前達と似た奴が居るし、仲良くしてくれな。」

「うん。」

「イーニア……。」

クリスカが寂しそうな顔をする。

「安心しろ、クリスカ少尉も一緒だ。」

「えっ？」

「二人で一つのお前達を引き離すことはしない。安心しろ。」

そう言いながらクリスカとイーニアの頭を撫でる。

無意識にはあるが、やはりどこかあの子を連想しているのだろう。

「ん。」

「なっ！？」

「お前達の過去に何があったのかは知らない。多分俺が想像出来ないような事があったんだろう。」

だがそれに囚われるな。前に進めなくなるぞ。」

「うん。」

「……分かった。なら指示には従う。」

「ありがとう。じゃあ、悪いけど着いて来てくれ。仮部屋まで案内する。」

「……了解。」

「うん。」

そして俺は自分の部屋に案内する。

その後の数日間は騒がしくなった。

イーニアはその愛らしい表情や純真なところが基地内で有名となり、（一部有志による）ファンクラブが出来た。

クリス力は当初は無愛想で排他的だったが、かつてリアにした様な体当たりで感情剥き出しで接していると数日で折れた。

まあ、三人で（無理矢理）風呂に入ろうとした際には本気で殺されそうになったが、この程度で折れる気は毛頭無い。

そして3日目で諦めた時にはつい拳を握ってしまった。

結果、周囲からは「幼女趣味？」や「重度の親馬鹿」と呼ばれるようになった。

第2話「計画、始動」（後書き）

黒「で弁解は？」

犬「これ自体は予定調和。」

黒「TEをぶち壊しておいて何を言うかこの駄作者は。」

犬「大丈夫。TEはTEで勝手に進むから。それに、この世界はA
Lとは無縁の世界だし。」

黒「それを言ったら終わりだろう。」

犬「それに、設定ではクリスカイニアは別のところで過ごしてい
た時点でTEぶち壊し決定だろう。」

黒「そうだな。で、最後の一文は？」

犬「遊び心。」

黒「赤犬つて、食べれるらしいな。（・―・#）」

犬「えっ？」

黒「終われ。」

犬「いやああああ！！！！？？？？」

ブラックアウト

第3話「新人さん、いらっしゃーい。」（前書き）

さて、財布がリアルにボーダーブレイク。
今月どうしよう。後5日もあるZE。

……土下座か。

第3話「新人さん、いらっしゃーい。」

2001年3月1日

side・黒川

帝国斯衛軍、訓練校。

一応、さまざまの武家のお坊ちゃんやお嬢様が通う訓練校。
そこに俺はある人物に会いに来た。

校門を抜けた先の大きな木の下にその人はいた。
髪の色は白銀で、顔立ちも日本人とは違うが、逆にそれが少女の雰
囲気を出している。

のんびりと食事を取っている少女。手にはおにぎりを持って美味し
そうに食べている。

数分後、食べ終わったのかお茶を飲みながらまったりし始める。

「リア。」

声を掛けるとこちらの方を向き驚いた表情を作ったかと思うと、突
如走ってくる。

「お父さん!!」

抱きついてくるリアを踏み止まって受け止める。
暖かい温もりを抱きしめて身体で感じる。

「約束どおり、生きて帰ってきたぞ。」

「そうだよ、お父さんは生きて帰ってくるもんね。」

リアの泣きそうな声に目頭が熱くなる。

「もちろんだ。」

「で、今日はどうしてここに？」

抱擁を解いて本題に入る。

「ああ、ちよつとばかり用事がね。」

「用事って？」

「これを渡しに来た。」

そう言うとA4サイズの茶封筒を鞆から取り出し渡す。

リアは早速中身の書類を見始める。

「……入隊許可書？」

「そう。この部隊にお前を引き入れたいらしい。」

すると少し困った顔を作るリア。

「別に良いけど、前提条件として訓令兵如きがこれほどの計画に入ってもいいの？」

その言葉を肯定するように頷く。

「構わない。お前の演算処理能力と戦術機特性が欲しい。」

「了解。今後はどうすればいいの？」

「参加してくれるのなら、この書類に必要事項を記入して提出してくれ。」

「了解。ところで、家族が増えたって本当？」

「ああ。本当だ。」

リアの問いに頷いて答える。

「会いたいな。」

笑顔で心躍らせている。

「会えるさ。まあ、昔のお前と同じくらい気難しいぞ。」

「へえ、楽しみだな。」

「じゃあ、用事も済ませたし帰るな。」

「うん、道中気をつけてね。」

「ああ、お前も風邪とか引くなよ。」

そう言う俺は踵を返し、訓練校を後にした。

……数日後、2001年3月8日

ブリーフィングルームは少し活気だっていた。

理由は今日、最後の隊員が到着するからだ。

その為か亜矢やあきらが新入りの洗礼を考えている様だし、イーニ

アやクリスカは少し落ち着かない様子だ。

しかし、やっと部隊としての行動が取れる。

と、扉を叩く音がする。

「入れ。」

「失礼します。」

入出する3人の少女達。

「そこに立ってくれ。」

「了解。」「」

そして白板の前に立つ。

「左から自己紹介を頼む。」。

「帝国軍より出向しました、伊隅まりか中尉、着任しました。」

「同じく伊隅あきら少尉、着任しました。」

「斯衛の訓練校より出向しました、リーリア＝黒川です。まだ至らない点が御座いますが御指導のほど、よろしく願います。」

3人の新任が敬礼するが、やはりリアだけ少しぎこちない。

「良く来た3人とも。俺は中隊長の黒川敏行少佐だ。以降は俺の指揮下に入ってもらう。良いな。」

「了解。」「」

「さて、先にリーリア二等兵。」

「はい。」

「特別出向と言う事で特例で准尉の階級を与える。階級に恥じぬ責任をもった行動をしる。良いな。」

階級証を手渡す。

「はい。以後は尉官として恥じぬ行動を取りたいと思います。」

「さて、今からは共に活動する仲間を紹介する。まずは大咲大尉からだ。」

そう言うと全員が立つ。

「大咲亜矢よ。階級は大尉、よろしくね新入りさん達。」

「八神あきら大尉よ。伊隅さんと名が同じだから、とりあえず今は八神と呼んで。」

「クリスカ・ビャーチェノワ少尉だ。よろしく頼む。」

「いーにあ・しえすちなしういです。よろしくおねがいします。」
「しかし……これは少佐の趣味ですか？」

伊隅あきら少尉の視線が微妙に痛い。

「後藤副司令に聞いてくれ。あの人が選んだ面子だ。」

「所でお父さん、あの二人が新しい家族？」

「そつだ。……知っているのか？」

少し驚いた声を出す。知っているとは思わなかったからだ。

「勿論。イーニア、クリスカ、久しぶり。また会えたね。」

「りあ、またあえたね。」

「な、何故ここに！？」

「危うく死に掛けたけど拾われてここにいるよ。」

「そ、そうか。」

「気にすることは無いよ。選んでここにいるんだから。」

「そうか……。」

「それに、割と面白い人生だから、後悔も何もしてないよ」

「うん、わかる。あのひとはつき。いつもそこでみまもってる。」

「正解。そう言う事よ、クリスカ。」

「私にはまだ分からない。」

「そつか。でもね、何時かは分かるようになるよ。」

「そつだな。」

どうやら話は纏まったと思ったので俺は手を叩く。

「さて、本日から俺達の拠点となる所に案内するから、付いて来てくれ。」

そう言つと俺は隊員を引率する。

side・まりか

正直、驚いている。

私みたいな衛士が帝国軍でも屈指の精鋭部隊、鋼の槍連隊の外接部隊とは言え、隊員になれた事に。

「ここが格納庫だ。今は機体来ていないから空だが、8機も揃えばかなり壮大になる。

あと、あまり整備員に迷惑を掛けるな。彼らが居て、俺達は安心して戦場に出られる。

彼らを敵に回すのは勝手だが、俺達に迷惑が掛かる時点でそいつは除籍とする。心しておけ。」

「無論、先方が原因ならばこちらもそれなりの対応は取るから安心しろ。」

また歩き始める。

今度はシュミレータールームらしい。

「ここが部隊専用のシュミレータールームだ。各国の全ての戦術機データが入っている特製仕様だ。
だから、ここはほぼ俺達専用になる。」

部屋の中に案内される。

「さて、全員今からシュミレーターに向かい、新人の歓迎会を行うぞ。」

その瞬間、扉が閉まり鍵が掛かる。

『!?!』

「そうね。24時間耐久レースよ。」

「泣き喚き叫んでも救いは無いわよ。」

「久々だから気分が高揚する。例えるなら、多数のBETAを相手に孤軍奮闘している様な高揚感だ。」

少佐達の顔が笑っているが、私達には笑っているようには見えない。むしろ、般若の微笑み。

「笑顔が怖いよ、お父さん。」

リーリア准尉が、青い顔で声が震えながら言う。そして自分も含めた他の子もガタガタ震えている。

その後は少佐と大尉達、私とあきらちゃんと3人娘と別れてシュミレーターで24時間休まず搭乗させられた。

そして気付くと朝には自分の部屋で寝ていた。

「あれは、夢じゃないよね。」

第3話「新人さん、いらっしやーい。」（後書き）

犬「さて、義理の娘達こと、三人娘が集結ですね。」

黒「時系列的にはどうなんだ？」

犬「リアちゃんはクリスカと同じナンバー（ビャーチェノワ）なのですが、

実験やお薬などの影響で成長が止まっていたました。」

黒「それではなく、出会いの頃だ。」

犬「それは大陸時代の一時ですが、それはまた後日と言うことで。」

黒「後に伸ばすのか？」

犬「なお、リアちゃんの体系はまりか中尉とほぼ同じなので悪しからず。」

あと、風貌はクリスカの顔にイーニアの髪です。」

リア「へえ。つまり、私はスタイルに関しては絶望と。」

犬「ごめんね、設定だから。」

黒「俺は知らん。」

リア「でもさ、もう少しボリュームが欲しいんですけど。」

犬「無理。」

リア「お父さん、今日は鍋で良い？」

黒「だったら赤犬にでもするか？」

犬「だが断る（キリッ）」

黒・リア「だが断る（キリッ）」

犬「いやああああ！！！！؟؟？」

ブラックアウト

第4話「本日、教習中。」（前書き）

別の所の感想で書き方の指摘があつたので書き直してみました。
まあ、また何かあつたら直します。

第4話「本日、教習中。」

3日後……2001年3月11日

side・大咲

「遅い、遠足気分か！お母さんの弁当がそんなに恋しいか！！」

外から罵倒の声が聞こえる。

声の主はこの部隊の隊長、黒川敏行少佐。

そして哀れな生贄は5人の新人たち。

「軍は貴様らに玩具を与える慈善団体じゃない。戦術機一機がどれだけするか知っているだろ！」

「お前達がこの部隊に居る限りは甘えは許さない。死すらも許されない。」

「倒れるな、走れ！！貴様を助けて誰かが死ぬんだぞ！！それでも良いのか！！」

「戦術機の性能は人の性能だ。自分が出来ないことが戦術機で出来ると思うな。」

「誰が休んで良いと言った！貴様の家訓は倒れるとでも書いているのか！全員5週追加だ。」

可哀想とは思わない。前日に同じ様なことを行っただけから。しかし、前線で女を捨てた私が言うことじゃないけど。

「もう少し、優しくできないのかね？。」

「何を？」

隣のあつきーが反応した。

「いえいえ、軍曹口調もどうかと思ってね。」

「あの丁寧で上品な言い回しのこと？」

「まあ、そうだね。まだ卑猥な言葉を言っていないだけ上等か。」

皮肉の効いた言い回しに呆れる。

「そうね。流石に乙女に向かって　　は不味いわね。」

「……あつきー、今は流石に酷いよ。」

「そうかしら？早めに経験していれば、黒川も……。」

「それは不味いつて。私達じゃないんだから……。」

嘗ての暴拳を例に挙げるが、思い出して考える。

若さゆえに暴走した青春の1コマを

「……止めようか。不毛だよね。」

「……確かに不毛ね。」

頭を振りかぶって記憶を消す。

お互い、古傷は触りたくないものだ。

特にあの記憶だけは厳重に保管し地中に埋めておきたい。

「思っただけどさ。」

「何？」

「何であんな事したんだっけ？」

「記憶から削除したから覚えてないわ。」

さいですかと小さく言うと、仕事に戻る。

「ところでさ、この山積みの書類の提出っていつまでだった？」

「今日中よ。名前書いて判子押すだけだから簡単よ。」

「そつか。03、今日の昼は奢らせるよ。」

「援護するわ、02。」

side・黒川

ん、何だか殺気が……気のせいかな？

「し、少佐。」

「ん？」

伊隅中尉が息を切らしながら呼吸している。

「ぜ、全員、か、完走しました。」

頃合いか。

「全員、午前の訓練は終了だ。昼食後、第2会議室で座学をみつちり行く。」

遅ければ、廊下にバケツを持たせて立って貰うから、そのつもりでな。」

「サー、イエス、サー。」

「さて、今日まで俺たちの訓練をよくこなした。ご褒美に、今日の昼食は全て奢りだ。」

好きなだけ選べ。質問は？」

「サー、イエス、サー。」

「さてリア准尉、大咲大尉と八神大尉を読んで来い。あいつ等にも奢るからと言えはホイホイ着いて来るから。」

それ以外にも理由があるが、言わなくてもいいだろう。蛇足だし。

「サー、イエス、サー。」

「じゃ、行くか。」

俺は先頭を歩いてその後ろを新人達がついてくる構図に、鴨の親子を思い出し薄く笑う。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない。」

伊隅少尉の質問を大雑把に返す。

流石に鴨の親子みたいだとは言えない。

「さて、今日は何にするかな？」

数少ない娯楽の1つ、昼食選びに物耽る。

食堂で全員の食事代を払うと席へ適当に座らせる。

「4500円か。結構減ったな。」

とりあえず、財布が軽くなったことを無視して席を探す。だが流石に昼の繁忙期。何処の席も満席で込んでいる。

「敏行、こつちだ。」

誰かが俺を呼ぶ声が聞こえた。

辺りを見回すと、手を振っている人を見つけたので、とりあえずその席へ向かう。

「ここだ、敏行。」

「幹也か。」

俺は幹也の目の前に座る。

「流石に込んでいるだろう。」

「ああ。娘達の席は有ったが俺の席が無かった。」

「ご愁傷様だな。ま、たまには良いだろう。」

「まあな。部隊に男が一人も居ないから結構大変だぞ。」

俺は合成しょうが焼き定食をご飯に乗せて一口で食べる。
正直合成だが、この味は好きだ。

「そうか。それは災難だったな。」

幹也が突いている合成親子丼もなかなか美味しそうに見える。

「一口交換、どうだ？」

「しょうが焼き一枚と交換なら良いぞ。」

「乗った。」

交換し、一口食べる。

「明日は親子丼だな。」

「俺も、明日はしょうが焼きにするか。」

「でだ、話を戻すが、副司令の決定だ、何かあるんだろう。」

「だろうな。昼行灯の異名は伊達じゃないぞ。」

「ああ。」

妙な間が空く。

「ところで、新型機はどうだ？」

「明日の昼頃、厚木経由でここに来るらしい。」

「ふむ。」

「それと幹也、あれは新型機ではない。試作機だ。」

「そうだったな。ところで、今後からお前達の所が外国製の戦術機で編成すると言う噂は本当か？」

手が止まる。

現状ではそこそ情報制限がしかれている情報が流出している。

だが、脳裏に万年水虫の副司令の顔が浮かぶ。

「……事実だ。実際、アグレッサー部隊としてはA Hは対米軍思想で決定だ。」

正直、こちらとしては苦渋の決断だった。

今までは過去の歴史からA Hは対ソ連、もしくはロシアを相手とした構想が多かった。

その最たる例が富士教導隊のアグレッサー部隊。

「人類の敵は人類、か。」

「そうだな。だが、この戦争の先などと腑抜けた考え方では、この世界に先はないな。」

本音をハッキリと言う。正直、こんな腑抜けな考え方は否定したいが、そこまでの権限が無い。

「手厳しいな。」

「事実だろう。」

お茶を啜り一服する。

「……さて、行くか。」

「ん、何処に？」

「座学。」

「ああ、なるほど。」

とりあえず、部屋に戻って資料を引っ張り出すか。

side・大咲

「BETAは基本的に複数の種類があり、光線級を除く全ての種類に纏まった共通点はありません。」

「……他にも未確認種がいる可能性も否定できないわ。」

「光線級が存在が戦場の風景を一変させたとも言えるし……。」

「戦術が無いわけじゃないわ。ただ、私達が見落としているだけ。」

「戦場で冷静になれない者は死と同じ。状況を冷静に把握し、最後まで生に執着しなさい。」

一通り説明し終えたので前を見ると、数名、頭から煙の様な物が見える。

まあ、本当に見えるわけじゃないけど。

「さて、リーリア少尉補。」

「はい。」

パソコンを操作し光線級、重光線級の画像を映す。

「重光線級と光線級のインターバルは？」

「重光線級で36秒、光線級で12秒です。」

「よく出来ました。基本だから覚えておいてね。」

リアちゃんを座らせ、要撃級と突撃級の画像を映し、伊隅少尉を指差す。

「さて、伊隅少尉。」

「は、はい。」

「要撃級と突撃級、撃破優先度が高いのは？それと、その理由は？」
「優先度が高いのは要撃級です。」

理由は、要撃級の高い定常円旋回能力と攻撃力、それに対人感知能力が原因です。」

「概ね合ってるわね。蛇足だけど、攻撃用の前肢ね。あれはある意味、光線級よりも確実な脅威よ。」

実際、要撃級の一撃は撃震でも大破は免れないし、陽炎や不知火なら一撃よ。」

実際の映像がこれ。」

映像をスクリーンに映し出す。

そこには、要撃級の一撃で大破する陽炎の姿だった。
その光景に一同絶句する。

「まあ、実際まだこれは良い方。死んだなんて感覚が無いから。
撃震だったら大破の後、戦車級に群がられて貪り尽くされるからね。」

手元のパソコンを操作し、戦車級の画像を映す。

「さて、最後は今出た戦車級。こいつらの対応は近づかれる前に殲滅あるのみだけど、取り付かれたらまず慌てないこと。そしてむやみに突撃砲で倒さないこと。」

IFFの都合上、味方に銃口が向けられない事があるの。

ついでに、老婆心からだけど短刀の訓練は怠らないでね。短刀は対戦車級の最大の武器だからね。」

「大尉、どうすれば上手く扱えるんですか？」

「それは経験だよ、伊隅中尉。シュミレーターでも実機の訓練でも良いからとにかく経験する事ね。」

経験こそが人間の最大の武器だからね。」

全員が頷く。

素直で良い子達。あの黒っちの部下とは思えない。

「さて、今日で基本訓練は終わり。後は日々訓練ね。」

本を閉じ、パソコンの電源を落とす。

「それと、明日からはシュミレーター訓練も出来るから、暇な時にしなさい。」

許可は取らなくても構わないわ。

ただし、書類だけは書いておいてね。誰が何時どれだけ使ったか知りたいから。」

「え、そんなに簡単で良いんですか？」

「まあ、この部隊の成り立ち自体が特殊だから、問題ないらしいよ。詳しいことは少佐か副司令に聞いて。以上、解散。」

『ありがとうございます。』

号令と共に解散する。

夕飯、何にしよう。

side・?????

「しかし豪華ですな。試作機をタダで入手できるとは。いやはや、その手腕を習いたいものですな。」

「まあ、餌をばら撒いて食いついたら焦らずに引く。釣りと同じだよ。」

ところで、アラスカのサーモンって美味しい？」

「ええ。特に今回は大物でして、脂が乗って美味しいですよ。」

「それは楽しみだ。」

「ええ。あ、そう言えば……。」

「どうしたんだい？」

「いえいえ、物語が脚本通りに行かないと思ひまして。」

「それが人生だよ。決められた道や変わらない日常に何の意味がある？」

人は変化の中で進化する。それは人として酷い間違いであり、正しい物だよ。」

「確かにそうですね。では、私はこれで。」

「うん。今度は葉巻が欲しいな。」

「葉巻ですか。何処が良いでしょうか？」

「ラングレー辺りが美味しいんじゃないの？お願い。」

「高いですよ。」

「それはいずれ精神的にお返しするって。ほんじゃ、お願い。」

「はいはい。」

第4話「本日、教習中。」（後書き）

アルバイト先であつた怖い話

一昨日、釜の火を点けるべくガスの点火栓を開けてチャッカマンで点火しようとしたら火が点かなかったんです。

一度、栓を閉めて、また栓を開けて火を点火するがまた点かない。よくよく見るとチャッカマンが一度では火が点かない事に気づいたので、火を点けた状態で栓を開けて入れると一瞬、全身を火が包みました。

本当に一瞬だけでしたけど、本気で死んだと思いましたね（- - - ;
）

その後に店長に怒られましたけどねw

しかし、やはり火の元注意ですね。
特に冬場は。

第5話「計画、本格的始動」(前書き)

一ヶ月未更新orz。

第5話「計画、本格的始動」

2001年3月12日、相馬原基地第2格納庫

side・黒川

天候は快晴、雲ひとつ無い爽快な天気。

そしてハンガーには骨組みだけになっている戦術機が二機居る。

「しかし、搬入された戦術機に試作機が混じっているとはどうなんだ？」

「さあ。私に聞かないでよね。」

隣に居た亜矢が肩を竦める。

俺はとりあえず、仕様書（の様な物）に目を通す。

「YF-23『ブラックヴィトウ？』」

『先進戦術歩行戦闘機計画でノースロック社がマクダエル・ドグラム社の協力を得て開発した試作戦術

機。

遠・中距離砲戦能力を重視している従来の米国製戦術機とは対照的に、近接機動性の重視、長刀・銃剣

の標準装備など対BETA近接戦闘能力を、設計段階から考慮されているのが特徴。

YF-22との実機模擬戦闘試験では両機共に一步も譲らない熾烈な戦闘を繰り広げ、対BETA近接格闘戦能力

に於いてはYF-22を遙かに上回り、総合性能でもYF-23が優位とも囁かれていた。

しかし、調達コストと性能維持に不可欠な整備性、何よりもその機体性能がG弾運用を前提とした米軍の

戦略ドクトリンと合致しないと判断された為、不採用となった。」

しかし、ブラックヴィトウ（黒い未亡人）とはよく言ったものだ。

「だが、C整備で当分は使用禁止か。」

「当然よ。愛機が整備不十分で命を落とすのは避けたいわ。」

隣の八神が呆れた口調で言う。

確かに野ざらしで置かれていたのだ、どんな損傷があるかも分からない機体に乗りたいくはない。

「で整備班長、どれ位要しますか？」

俺は整備班長の芝茂雄さんに尋ねる。

「C整備を2機だからね、稼動状況まで整備班緊急シフトを組んで3日〜4日かな。」

まあ、これ2機だけだからそんなに掛からないよ。」

「ご迷惑掛けます。」

「良いよ、別に。米国の戦術機が長刀振るうのにどんな構造をしているのか全員興味津々だよ。」

見ればスパナを持った整備員の目が光っていて怖い。夜に出ると間違ひなく子供は泣くな。

「おとうさん、こわい。」

イーニアが震えながら服の袖を引っ張る。

その姿に整備員数名が倒れるが無視する。

「大丈夫、徹夜明けの俺達の方が怖い。」

「そうだね、半分死んでるよね。主に顔が。」

「そうね、半分死んでるわね。主に肌が。」

二人とも死んだような顔をし、俺も暗い雰囲気を展開する。

「りあ、こわい。」

「気にしたら負けだよ、イーニア。」

リアがイーニアを抱きしめながら言う。

「各自、搭乗する戦術機の調整をしておけ。いざ実戦で不具合が出ても知らないぞ。」

『了解。^{りょうかい}』

「大咲はまだ良いからな。3日後に行く。」

「了解。」

「では解散。」

俺は各自に当てられた戦術機の早見表を見る。

『コールサイン・搭乗衛士名・搭乗戦術機』

イージス01・黒川敏行少佐・YF-23 RAV2

イージス02・大咲亜矢大尉・YF-23 RAV1

イージス03・八神あきら大尉・F-15E

イージス04・イーニアシエスチナ少尉・F-18F

イージス05・クリスカビヤーチェノワ少尉・F-18F

イージス06・伊隅まりか中尉・F-15E

イージス07・伊隅あきら少尉・F-15E

イージス08・リーリア黒川准尉・E-18G』

この中で難物なのは俺と亜矢、それにリアだろう。

特にリアの戦術機は情報収集に特化した機体なので通常よりも高度な情報処理能力が必要になる。

それに加え、故障などすれば基盤を交換する可能性もあり、修理と調達に一苦労と来る。

（問題児筆頭だな、リアの愛機は。）

溜め息を吐いてしまう。

だが、使い所さえ間違えなければ対戦術機戦では無敵となり得る可能性を秘めている。

まあ結局は使い方次第だろう。

「よし、全員揃ったな。」

「後藤副司令に敬礼。」

「おう、元気だな。さて、そろそろ計画の全貌でも話しますか。黒川。」

「はっ。全員、会議室へ向かうぞ。」

『了解。』

会議室のパソコンを使い、シークレットファイルを開き、白板に映し出す。

「XFJ計画。」

「この計画はお偉いさん（国防省）が新型戦術機が実戦配備されるまでの間、不知火の改良をもって戦

力の充足を図ることを期待して生産された不知火・壱型丙である。だがこの機体は、当初の想定以上に燃費が悪く、稼働時間が低下して通常運用が難しいため、総機数が

100機未滿で生産中止となってしまった。

その為、不知火の改良計画は日米合同の戦術機開発計画であるXFJ計画の中に組み込まれ、改めて研究が

行われることになった。その中で誕生したのが、この不知火・貳型である。」

「だが、それとは別に外国製戦術機を国産戦術機に改修して量産する計画が生まれた。

それがこの次期主力戦術機開発計画だ。

この計画の裏側には、純国産に拘り袋小路に陥っている帝国の体質を変えるべく、巖谷中佐と共に副司

令が唱えた計画だ。」

「さて、その大まかな内容だが。」

01・戦術機はYF-23をベース機とする。

02・国産パーツと外国製パーツの相互利用による整備時間の短縮と調達コストを抑える。

03・低コスト高性能の実現。

04・補助システムで新兵でも熟練衛士並みの操縦技量を確立する。

「なお、一応だが不知火式型とのコンペも行われる。」

「ひゅ。」

口笛を吹く大咲。

「つまり、どっちが勝っても日本の技術革新は行えるって事ですか？」

「実も蓋もないが、そうだな。実際、技術革命として十分な起爆剤だろう。」

実際、どうなるかは分からないが。

「まあ、負ける可能性がひじょに高いが、出来レースにするつもりは無いからな。」

「それは勿論です。何時如何なる時でも全力を以って任務を遂行します。」

後藤副司令の注文に頷く。

正直、八百長は死んでもごめんだ。

「ですが、計画はあちらの方が長いのでは？」

「残念。計画自体は俺達の方が長いんだよ。けどね、実行する為のお金が無かったからお蔵入りだった

だけ。

もう少し理解あったら良かったんだけどね。連中、1型内の事で頭

が一杯だったから。」

とりあえず、その計画の初期から関わっている俺は無言になる。

「大佐、上の借金のツケが私達に来るんですか？」

「しょうがないでしょ。上が馬鹿なら下が優秀に成らないと。この業界、生きていけないよ。」

大咲が文句を口にすると、後藤副司令が大袈裟に手をあげる。

「副司令の言っている事も確かだな。」

「そうだね。ここも同じだし。」

「ええ。上がサボりの常習犯なら下は苦勞する。」

俺も首を縦に振って同意する。

「さて、大雑把に分かった所でお前ら、機体の調整しに行け。自分の機体ぐらい自分で育てろ。」

『了解。』

side・あきら

戦術機『F-15E ストライクイーグル』

スペック表だけでは日本の陽炎とは雲泥の差と言える内容だ。

陽炎のベース機のF-15Cとは80%近く中身が違うから、扱いが難しそうに思える。

「うーん。」

仕様書と睨めっこをしながら設定をしていく。

だがなかなか終わらない。

隣のリア准尉を見てみると、すでに終わっているのか下で茶坊主をしていた。

よく見るとクリスカ少尉たちや八神大尉も終わったのか、下でお茶を飲んでいる。

「早いな。私もあれだけ早かったら……。」

「リアちゃんたちは先天性の能力、あっきーは経験。逆立ちしたって追いつかないよ。」

声が聞こえるのでこちらの方を見ると大咲大尉が立っていた。

「大尉!？」

「努力したって凡人は凡人。逆立ちしたって天才には追いつかないわ。」

「そ、それは……。」

「でもね、あなたはまだ若いから努力しなさい。努力し続ける天才になりなさい。」

「えっ?」

「私だってね、経験積んでここまで来たんだから、同じ時間を掛ければ同じ所には来れるよ。」

「はい。」

「それこそ、あそこで難しい顔してる隊長も、初めはチキンだったんだよ。」

「……想像できませんね。」

「そうでもないよ。前線の兵士は皆仲良くジョン・ドウ。ボディバツクも必要なし。」

そんな事が日常茶飯事だったからね。強くなる、じゃなくて強くなければ生き残れない。

それ故に凡人を辞めて英雄になろうとしたんだよ。」

「英雄……。」

「けどね、話には続きがあつてね。」

「続きですか。」

「太陽（神）に近づきすぎた英雄は、^{イカロス}ロウで固めた翼を焼かれて地に落ちたってね。」

「それって!？」

遠まわしに、少佐は死ぬかもしれないと言っているのと同じだ、と「分かっているよ、あいつも。けどね、もう止まることは出来ないの。ここまで来たんだから。」

「……。」

「だからさ、その時には私達だけで十分だからね。」

「はい……。」

何となくだが、少佐達の闇の一部が見えた気がする。

side・あきら

目標を視認する。

少佐の愛機、F-15J改「翼竜」。

私の搭乗しているF-15Eに劣る筈なのだが、少佐が乗ると数段上に感じる。

「エンゲージ・オフエンシヴ。イーグス05、フォックス03、フォックス03。」

目標をロックオンし、36mmを掃射する。

しかし、直前で視界から消え、一発も当たらない。

「くつ。」

『FSCばかり頼るな。手動補正も掛けていけ。特に高機動戦闘時はFSC処理が追いつかない場合もある。』

それと相手を撃とうとするな。相手の二手先を呼んで撃て。そうすれば当たる。』

「りよ、了解。」

僕は言われた通り先を読んで撃つが、当たらない。

『筋は良いが、意識し過ぎだ。』

「は、はい。」

続けて先を読みながら撃つ。すると、とうとう一発が少佐の機体を掠る。

「あ。」

思わず声が出る。だが、その直後に弾の雨が機体に命中する。

「あれ？」

『良い読みだ。が、最後で気を抜いたな。これはその罰だ。』

手厳しい一言だった。だが、その声色は優しい感じがする。

「……はい。」

『よし、今度は実戦形式だ。04、05とエレメントを組め。開始は俺がレンジアウトしてから1分後。今度は正面から行くぞ。』

「了解。」「」

返事をする。

『イージス01、戦線離脱する。02、03は時間を計測。頼むぞ。』

『了解。』『』

すると少佐の機体が高速で離脱していく。

side・黒川

窓から見える夕焼けが空を橙に染める。

そして机には俺達ベテランを除く全員が机に伏していた。

「ご苦労様。今日の教導は終わりだが、生きているか？」

へんじがない。ただのしかばねのようだ。

何かが聞こえた様な気がするが、あえて気にしない。

「さて、大咲大尉はどう見る？」

「若いつて良いわね。覚えも良いし、今日一日で色々なことを学べたと思うわ。」「

大咲が相変わらずな事を言う。一応、俺たちも十分若いのだがな。

「八神大尉はどうだ？」

「そうね。経験が無いんだから、体に刻んでもらうしかないわね。ただ、この状態で実戦って事も有り得るし、早めに仕込みたいわ。」「

「そうだな。」「

無意識に握る手が食い込む。

例えそれが起きたとしても、それだけは全力で阻止する。

「全員、起きれるか？」

すると徐々にだが全員が起き上がり、姿勢を正す。

「もし今の現状のままで全員を戦場に出せば2人から3人は高い確率で死ぬ。

俺達も万能ではない。そして戦場では皆平等だ。死ぬのも生きるのも運。これだけが戦場での唯一のル

ールだ。

だから、俺よりも長く生きろ。生きて、生きて、生き抜いて、俺達が生きていた証として存在しろ。

良いな!!」

『了解!!』
りょうかい

全員が席を立ち敬礼する。

「さて……。」

『黒川少佐、黒川少佐、後藤副司令が呼びです。直ちに副司令室までお越し下さい。繰り返します…』

…。」

溜め息を吐く。良い予感が一切しない。

「全員、良い予感がしないから覚悟だけしておけ。解散。」

そして俺は一路、副司令室を目指す。

「1週間後に帝都本土防衛軍との合同演習ですか?」

「そうだ。要望はあちらから、見返りは経験と宣伝。どうだ?」

少し思案に暮れるが、条件が異常に破格過ぎる。まるで裏があるかのように。

「条件が破格過ぎますね。他にも何かあるんでしょう。」

「正解。大方、俺達を負けさせて計画中止に持ち込もうって腹だろ
う。」

あそこの師団長はバリバリの国産派だからな。」

溜め息を一つ吐き、命令受諾の意味を込めて敬礼する。

「了解。」

「それと、当日は出資者や後見人が来賓として来るから無様な戦いだけはするなよ。」

俺はそれに無言の敬礼で答える。

第5話「計画、本格的始動」（後書き）

今年最後の更新です。

はい、遅れた事情は単純に受験で身動きが取れませんでした。

あと、主に手続きが異常に面倒で、手間取りましたが、何とか合格はしました。

来年からはまた忙しくなりそう。

では、よいお年を。

第6話「合同演習・前編」（前書き）

何か、あれよあれよと1／31。

……言い訳は、戦闘描写にこだわり過ぎて收拾がつかなくなりまして。

なので、前編と後編に分けることにしました。
どうしてこうなった!?

第6話「合同演習・前編」

2001年3月19日

side・黒川

帝国軍厚木基地演習場傍のテント。

俺達は椅子に座り、コーヒーマドキを飲んでいた。

「不味い。泥水嚙ってる様だ。」

正直、香りも味も悲惨。だが、それを飲まないとやれない状況にある。

早朝出立なので、兎も角眠い。

ベテラン組は多少大丈夫そうだが、新人組は顔が虚ろ、イーニアはまだ寝ている。

唯一例外なのは整備班の所へ出向いているリアだけだろう。

「同感。天然物はないの？」

不味そうな顔をして大咲がぼやく。実際、不味いんだろうけど。

「残念だが種切れた。次の密輸まであと一週間は掛かる。」

流石に10kg買ったが、使えば無くなる。こればかりはどうしようもない。

しかも定期便は未だ海の上を航海中。

おかげでこの泥の様なコーヒーマドキを飲んでいる訳だが。

「一週間か。長いわね。」

カップを回しながら少し残念そうな顔をする八神。

娯楽が少ない現状、コーヒーが楽しみなのは分かるが、そんな残念そうな顔だけはして欲しくない。

まるで、俺が悪い風に見える。

「しょうがないだろう。定期便が来る時くらいしか入らないんだからな、闇市では。」

「え？闇市とか、違法じゃ……。」

伊隅中尉が阿呆な事を言ってる。

全く、部隊のお嬢様方は無知と言うか純粹と言うか。

まあ、その熟れた方々よりは良いか。

「少佐、今かなり失礼なことを考えなかった？」

「何が？」

とりあえず惚ける。

バレれば確実に殺されるし。

「次はないからね。」

意味深げな事を八神が言う。

それに無言で頷いて答える。

「けどま、盗品はアウトだけど、密輸は引つかからないぞ。」

屁理屈だが、筋さえ通せば理屈になる。

実際、暗黙の了解と言つ言葉もあるし所謂、前線で快適に過ごす方法のひとつだな。

「そうよ。それに、上だけが天然で下が合成つて、不公平すぎるでしょ。」

「そうね。それに今までのコーヒーや少佐の秘蔵品、それに七瀬大尉の秘蔵品も闇市のものよ。」

とりあえず、帰ったら部屋にあるウィスキーやウォッカを別の棚に仕舞おう。

じゃないと、こいつらが勝手に飲みそうな気がする。

「うわあ。僕達、そんなものを飲んでたんですか？」

「それって、良いんですか？」

そんなのとか、それって言われると結構傷つくな。

一応、あの手この手を使って入手した良い物なのだし。

しかも1kg/5000もする高級品だし。

「だから言つたでしょ。盗品じゃないんだから。」

「ま、現実はいつも無慈悲だ。理想を抱くだけなら誰でも出来るぞ。」

実際、理想を現実にするには、相応の犠牲が必要になる。
今度は座学で教えてみるか。理想と現実の違いとか。

「でも、これも慣れれば面白い味に感じるわよ。」

「妥協すれば飲めるな。」

本当はしたくないのだが。

人間生きる為には妥協と止揚を上手く使い分ければ良い。

「味覚が狂ったの？」

「言ってる。」

「少佐。」

と、いつの間にかリアが帰ってきていた。

「ん、リアか。どうした？」

「全機準備完了。ところで、大佐はどちらに？」

「向こうでカボチャやピーマンとお話中。やれ無駄金だの無意味な部隊とか嫌味を言ってるぞ。」

その筆頭にペン回しの得意な帝国陸軍参謀本部付き中佐が居る。今頃、普通の人なら致死量に値する毒を吐いているのだろうな。……まあ、大佐にはあまり意味の無い事だろう。あの人、右から左に流すだろうし。

「えっと……遠慮します。」

「だろうな。俺も……。」

『黒川少佐、後藤大佐が呼びです。至急、来賓席までお越しください。』

無意識に十字を切る。……仏教徒だが。

「……口は災いの元。今度からは考えて喋ろう。」

「頑張れ。応援だけはするよ。」

「頑張ってるね。同情はしないわ。」

「その、お疲れ様です。」

大尉連中は楽しんでいるが、伊隅少尉だけが心配してくれた。

「伊隅少尉、ありがとう。」

そう言うと席を立ち来賓席へ向かう。

来賓席は、物々しい警備状態が敷かれていた。
少し厳重すぎる気もする。よほどのVIPなのだろう。
想像では榊首相かそれに連なる人達か？

「止まれ。」

「帝国軍、本土防衛軍所属、黒川敏行少佐だ。」

「失礼しました。どうぞ。」

だが所属を言うと警戒が解かれる。
どうやら、嫌な予感はあるものらしい。

「黒川少佐、入ります。」

「おう、入れ。」

「失礼します。」

予想の斜め上に行く人たちを見て、呆れてします。
目の前に煌武院悠陽殿下と月詠真耶大尉が後藤副司令と話し合っていた。

「正月以来ですね、黒川。」

「久しいな、黒川。」

声を掛けられ、正氣に戻ると直ぐに敬礼をする。

「は、殿下もご健在で何よりです。君臣、心より安堵しております。それと月詠大尉もお久しぶりです。正月以来ですね。」

春の日のような暖かさの悠陽殿下と、薔薇の様に美しくも棘がある月詠真耶大尉。

対極だからこそ相性が良いのだろうかといいつい考えてしまう。

「ええ、お兄様こそお元気そうで。」

「殿下。幾ら私が世話役だったとは言え、公式の場ではお控えください。」

それに月詠大尉からの視線が痛い。

視線で人が殺せるのなら、間違いなく死んでいる程に。

「いえ、何時如何なる時も如何なる事があるうとも、お兄様はお兄様です。」

悠陽の優しさにグッと来るが、それに比例して大尉からの視線が増加する。

「いやいや、少佐。美人に思われて男冥利に尽きるだろう。」

一瞬、大佐を本気で殴りたい衝動に駆られるが、鋼鉄の意志で押し留める。

「無論、黒川家の誇りです。しかし、此度はどのようなご用件で？」

すると、空気が変わるのを肌で感じる。

「黒川敏行、此度の結果次第ではこの計画の支援を打ち切ります。」

「それは重々承知しております。無論、此度の一戦で良い結果を出しましょう。」

「分かりました。」

「えは、そろそろ時間なので失礼します。」

「ええ。御武運を。」

俺はそれに敬礼で答える。

「全機、作戦を伝える。」

ホワイトボードに戦力差を書く。

『戦術機36：7』

普通なら無理と匙を投げるレベルの戦力差だろう。

ま、負ける気は毛頭無い。

あれだけの大見得を切ったのだから勝つ以外に道はない。

「現状、戦力差はおよそ5：1。明らかに我々のほうが不利だが、これは卓上の数字に過ぎない。」

「と、言うത്？」

「まあ待て伊隅少尉。敵指揮官は沙霧大尉。奴は戦力を中隊に分けるはずだ。」

再び戦力差を書く。

『戦術機12：7』

「2：1ね。」

「けど、まだ厳しいわね。08は情報収集で戦闘に不参加だし、直営に一機必要だろうし。」

「あと一手、ですか？」

大尉達の言葉と伊隅少尉の言葉に頷く。

「そこで、だ。秘密兵器をこの三箇所を設置。」

地図に三箇所赤い磁石を置く。

「08のデータを受信しながら待つ。敵影確認後、煙幕弾、閃光弾を使用し一斉放火で蹂躪する。……質問は？」

大咲が手を上げたので指名する。

「こちらの編成は？」

「04は08の護衛。08は所定の位置でパッシブ、レーダーを使用しろ。サーマルは昼間だから役に立たない。」

「了解」^{じょうかい}「了解」

「残りは02・03、06・07とエレメントを組め。」

「了解」^{じょうかい}「了解」

「全機、搭乗。今までの訓練を思い出して行動しろ、いいな。」

「了解。」

さて、始めるか。

side・沙霧

『沙霧大尉、反応確認。数は3。』

「どう言う事だ、現状で戦力分散とは。」

黒川少佐の事は大陸で知っているからこそ、疑問しか浮かばない。彼は少なくとも、この状況下でこの様な博打は打たない筈だ。遮蔽物のある市街地戦では奇襲を以って対応するはず。

『大尉、相手は所詮は技術屋つて事ですよ。』

「中尉、君は本気でそんな事を言っているのか？」

飯島中尉の言葉に呆れてしまう。

彼は確かに優秀だがどうしても相手を侮る癖がある。

だが、この国を憂う気持ちは確かだから仲間にしたが。

『だったらあの布陣は何なんですか？素人だつてしませんよ。』

『だが、黒川少佐は大陸から生き抜いてきた猛者。沙霧大尉と互角の衛士よ。』

他にも大咲先輩や八神先輩は一流の衛士。大尉、私は奇襲が目的だと思われます。

ここは大隊で行動し一気に殲滅すべきです。

あの二人を生かしておいては後々大変な目に逢います』

駒木君も私と同じ意見らしい。

彼女も、大咲大尉や八神大尉に楽しい『教育』を施されたのだろう。最後のほうを話しているときの彼女は少しばかり怖い。

『それじゃ、あの数が理解できません。奇襲しても返り討ちできませんよ。』

ここは奇襲を潰す為に中隊で動くべきです。』

確かに飯島中尉が言っていることも間違いとは思えない。もし乾坤一擲だったとしても数の上では不利。

局地的には勝利しても全体で負けている。

「……駒木中隊は中央、飯島中隊は右翼を、私は左翼を調べてみる。異常があればすぐに通信で援軍を呼べ、いいな。」

『了解。』

「散開。」

だが、私の胸に一抹の不安が残る。
あの少佐がこれで済むのだろうか、と。

第6話「合同演習・前編」（後書き）

ボーダーブレイクで財布がブレイクしていくorz
しかし、やっとマップが変わってくれた。
さて、クラン演習でポイント貯めようか。

外伝01「バレンタインデーkiss」(前書き)

注意!!

このお話は時系列を全く無視したifのお話です。

チヨコが手に入ったり、居る筈の無い面子が出てきますが大らかな心で見てください。

あと、タイトルに深い意味はありません。

ぱつと浮かんだものを書きました。

無理ならブラウザの戻るを押してください。

では、本編へどうぞ。

外伝01「バレンタインデークiss」

20XX年2月14日 相馬原基地食堂

side・黒川

いつもの席で食事を取っていると幹也が近づいてくる。
手には可愛い包装がされている手のひらサイズの箱を持って。

「幹也、その手に持ってるのは何？」

「チョコだ。そこで御手洗に貰った。」

チョコ？チョコ、チョコ、チョコ……………。

「……………ああ。そう言えばバレンタインだっけ。」

「何だ、それ？」

初めて聞いたのか、不思議そうな顔で尋ねてくる。

「俺の聞きかじった話はローマ帝国時代にキリスト教司祭だったウ
アレクティヌスが居たんだ。」

「ふむ。」

幹也が聞き入っている。

良く見ると回りも聞き入っているように見える。

「で、その彼女が当時皇帝だったクラウディウス2世が兵士達を秘

密裏に結婚させた罪で処刑されて、
その日が女神ユノの祝日だった事からウァレンティヌスがヴァレン
タインになったと言われている。」

「結婚させただけで処刑か。残酷だな。」

幹也の言っている事も一理あるが、若者を戦場に出す今の日本も残酷だろう。

口に出して言えないが。

「当時は、愛する人を故郷に残した兵士の士気が下がるという理由で、ローマでの兵士の婚姻を禁止したといわれている。
まあ、これも諸説ありだろうがな。」

とりあえず付け加える。

実際、悪法もまた法と誰かが言ってたし。

「そうだな。で、この場合どうすればいいと思う？」

相変わらず真面目に考える幹也をおちよくりたくなった。

「さあ。気前良く結婚指輪を渡して『君が好きだ、結婚してくれ。』
とお返しすればw」

「少し、頭冷やそうか？」

幹也が握りこぶしを握り振るおうとする。

「でもま、答えてやれよ。彼女の気持ちだってお前には分かってる
んだろう。」

「それは……。」

実際、幹也は鈍感ではない。

だが、他人の好意にどう答えて良いのか分からないだけだろう。けど、それが逆に俺には危うく見える。

「答えだけはちゃんと決めて置けよ。お前の後悔する姿は見たくないからな。」

「すまん。」

「良さ。さて、とりあえず帰るから。愚痴くらいは聞いてやるよ。」

「了解。」

食堂を出て少し歩くと二箱を持った神田少佐と出会う。

「ん、黒川か。」

「あ、神田少佐。人気ですね。」

少し冷やかし交じりで言うあたり、俺も性質が悪いな。

「チョコを貰ったが、これは一体なんだ？」

「ヴァレンティンですよ。」

「何だ、それ？」

ヴァレンティンに関して説明中。

「ふむ。」

「春原と小尾原ですね。」

「お返しはどうすれば良いと思う？」

さつきは幹也だったからからかえたが、神田少佐をからかう度胸はない。

故に神妙な顔つきで考える。

「なら、休暇にでも食事に誘われてみては？」

「良いかも知れないな。ありがとう、黒川。」

「いえいえ。では、失礼します。」

「ああ。」

神田少佐と別れて俺は会議室へ向かう。

「あれ、日高大尉、それは？」

「あら黒川。ほら、今日がバレンタインでしょ。だから堀江と二ノ宮にあげようと思ってね。」

「お優しい事で。」

皮肉を込めて言う。

間違いなく何か細工しているんだろうな。

「これ、あんたの分。」

「どうも。他には誰に？」

「七瀬と神田少佐、川平ね。」

「因みに、外れは？」

「強力！！ウォツカ入りね。」

『強力！！』と強調するから、相当強いんだろうな。とりあえず、祈るか。ウォツカ入りに当たる阿呆に。アーメン。

「じゃあね。」

「はい、武運を。」

さて、川平辺りかな？不幸な生贄は。

「はい、お父さん。」

入室早々、リアからチョコを貰う。

「ん？チョコか。」

「そう。三人で作ったから食べてね。」

「つくったよ。」

「まあ、その、何だ。味に自信は無いが。」

何か微笑ましい光景に頬が緩む。

ある意味、地獄の中の平和の一時だな。

「ありがとう。」

「黒っち。チョコあげる。」

「敏行、チョコよ。」

今度は大咲に八神からも貰う。

……食べきれるかな？

「ありがとう。それより、どうしてこんな事が始まったんだ？」

「さあ。」

「知らないわ。」

「そうか。」

まあ、深く突っ込まないでおこう。

突っ込んだら負けのような気がするし。

「しかし、伊隅姉妹は大変そうだな。」

「確か外出許可を取ってチョコを届けに行きましたよ。」

「愛は盲目なりか。よく言っただものだ。」

「あら少佐。愛は力なり、ですよ。」

「そうだな、八神。」

「さて、食べるか。茶を頼む。」

「了解。」

そう言つと大咲は給湯室へ向かう。

「さて、仕事仕事。」

俺は机に向かい作業を開始する。

次の日、案の定、川平が頭を抑えながら食堂で飯を食っていた。
ご愁傷様。

外伝01「バレンタインデーkiss」(後書き)

チヨコ欲しいな。

彼女を作るのが当面の問題だけどorz
ファイト、俺。

第7話「合同演習・中篇」(前書き)

まず、被災された皆様のご冥福をお祈りします。

話は変わり、gdgd感が否めない。

戦闘描写の難しいこと。

アニメだと判り易いけど小説だと……。

第7話「合同演習・中篇」

side・飯島

黒川敏行。

僅か23歳で少佐に昇進した期待の新人。
だが、俺たちからしてみれば面白くない話だ。
大方、上官に取り入って階級を手に入れたんだろう。
でなければ、若くして少佐になれない筈だ。
考え事をしている瞬間、辺りを煙が包む。

「な、なんだ!？」

そして轟音と共に戦闘不能と表示される。

side・黒川

36mm突撃砲の一斉放火の轟音が辺りを包む。
絶え間ない砲撃がしばし続く。

「全機、撃ち方止め。」

射撃が止み、煙幕が消えると、ペイントだらけの不知火が12機居た。

『しかし少佐、このTSFポットって便利ですね。』
「効果だけを見たらな。弱点もある。」

しかも致命的とも言える物が。

『例えば？』

「BETA相手に効果があるのか分からない、味方にも識別されるから展開次第では不味いことになる。」

あと、コスト面から使い捨てにし難い等がある。」

『確かに問題ですね。』

『難しいですね。こう言うのって。』

伊隅少尉の言っていることも尤もだ。

兵器は使いどころ次第では敵にも味方にもなる。

そう言う点では今回は非常に役立てれる。

「そうだな。だが俺たちのやっている事は苦勞はあっても無駄ではない。」

この失敗を次に活かせるのだからな。

だから重要な所以外では間違えても修正していくぞ。」

『『『了解！！』』』

元氣の良い奴らだ、全く。

こんな部下を持てたのは僥倖だな。

「……次の狩場に行くぞ。レーダーやパッシブに目をやれ。良いな。」

『『『了解。』』』

しかし、指揮官が下手糞だったな。親の七光りか？

……どうでもいいか。倒した敵だからな。

side・駒木

「第3中隊のシグナルロスト。全滅の様子。」
『やはり狩りか。』

大尉の声が後悔していることに気付く。

「大尉は、予測しておられたのですか？」

すると大尉の顔は苦虫を潰したような顔で頷く。

『予測はしていたからこそ分けたのだ。だが、今回は裏目に出たらしいな。』

「やはり、少佐がこれを？」

私の疑問に大尉が頷く。

『このレーダーに反応しているのはTFSPOTTだろう。』

「何ですか、それは？」

初めて聞く兵器の名前に疑問が湧く。

『試作段階の兵器で、擬似的に戦術機と同じ音波を流し、レーダーに誤認させる装置だ。』

「そんな物が。」

『戦術機相手ならば良いが、BETA相手には効果がない為、量産化されない所謂、お蔵入りの品だ。』

私は頭を切り替えて今後の事を訪ねる。

「大尉、もし、次の目標を狙うとすれば？」

『駒木君、少佐の次の目標は君達だ。少しだけ、持たせてくれ。』

「了解です、大尉。」

その直後、閃光が辺りを包む。

side・大咲

「今だ、相手が体勢を整える前に仕留めろ。」

「了解!!」

閃光は遮光フィルターで防いだからこちら側には大して効果がないが相手の方は大打撃。

今頃は目が眩んでまともに見れない筈。
だがその中でも正確に射撃してくる一機の不知火が居た。

「へえ、駒木中尉か。」

あの子が敵として迎えるのは久しぶりだから。
自然に笑みがこぼれる。

「02、噛み砕け。」

「了解、01。」

左手で模擬長刀を抜くと相手は正確に管制ユニットを狙ってくる。
だが、余りにも正確すぎる。

私はそれを模擬長刀で防ぎ右手の36mm突撃砲を乱射する。

「まだまだ真面目すぎるよ、駒木中尉。狙いが正確すぎて逆に単調だよ。」

「やはり教官ですか。」

「教官じゃなくて大尉だよ、中尉。」

相手も長刀を抜いて斬りかかってくる。
それに向かって突撃砲を投げつける。

しかし見事に長刀に弾かれる。だが、予測通り。

「その体勢は鬼門だよ。」

跳躍ユニットを使い一気に距離を詰める。

『くっ。』

駒木も体勢を立て直そうとするが僅かに遅い。

Y F - 23と不知火とでは推進力でこちらの方が数段上なのだから当然だが。

「その1、接近戦で体勢を崩した方が負け。」

だが長刀同士が噛み合い火花を散らす。

流石と言いたい、まだまだ詰めが甘い。

『しかし「その2、気持ちで負けたものは負ける。」』

罅迫り合いを無理やり解き距離を離す。

その直後に駒木機の管制ユニットが赤く染まる。

「パーフェクトよ、03。」

『貸し1ね、02。』

87式突撃支援砲を構えているF - 15E(02)。

「その3、つねに周囲にも気を配っておく。」

「1対1なんて稀。1対多数を常に念頭に置いておく事。」

『流石、手厳しいですね、教官達は。』

「飴と鞭だよ、中尉。じゃあ、またね。」

『は、御武運を。』

敵に武運を祈られるのは不思議と面白い気分になるな。

side・伊隅あきら

圧勝、あの帝国本土防衛軍を相手に圧勝している。
気持ちが高まる。

『05、右だ!!』

「え?」

そこには、肉薄する不知火の姿が見えた。

「ひっ!?!」

『はあああ!』

『舐めるな沙霧!』

機体に衝撃が走る。

何が起きているのか分からず、状況判断が出来ない。

『02、you have a contror。』

『01、I have a contror。』

side・沙霧

注意力散漫の一機を確実に捕らえたと思ったが、次の瞬間、その機体が蹴り飛ばされた。

代わりにYF-23が突撃砲を撃ち始めた。

だが私はそれを右に避けて回避する。

「流石です、少佐。味方を蹴り飛ばして助けるとは。」

『舐めるな沙霧。俺は今日まで地獄の一丁目を渡り歩いて来た。後方の微温湯に浸かっているお前と一緒にするな。』

「だが、私にも帝都本土防衛軍の意地がある！！」

中距離からの突撃砲の撃ち合い。

決定打にはならないが互いに近づけない現状がもどかしい。

だが、少佐を相手に不用意に接近戦をしようとすれば蜂の巣。

……全く決定打に欠ける。

すると、少佐の機体が静止する。

その直後、突撃砲を全て捨て、長刀を抜く。

『意地でどうにかなるなら見せてみる。口先だけの男ではあるまい。』

」

その意図を理解し、私も長刀を抜く。

一対一の刺しでの勝負。

私も大概だが、少佐も中々人が悪い。

「無論！！」

長刀の鏑迫り合い。

関節が鳴り火花散る。

「くっ。」

『どうした沙霧、それが限界か？』
「まだです。」

罅迫り合いを解き、体勢を整えようとするが、相手はそれを許さないかの様に私の不知火に突っ込んでくる。

「まさか！？」
『遅い。』

そして少佐のYF-23と不知火が激突し横転する。
激しい振動と管制ユニット内が揺れるが、気を失わずに済んだのは奇跡だろう。

その直後、短刀を構える相手の姿が映る。

『実践では如何なる事態も想定する。それが指揮官だ。』
「無念。」

その直後、撃墜の文字が辺りに表示される。

「流石です少佐。……やはり最大の障害は少佐か……。」

誰に聞こえる事も無いくらい、小さな声で呟く。

第7話「合同演習・中篇」(後書き)

最近のこと。

ボダブレ、A 1 A 2 A 1の繰り返し。

A 2とA 1の難易度が段違いすぎと思うorz

第8話「合同演習・後編」(前書き)

1ヶ月放置、申し訳ありませんでした!!

しかし犬はめでたく専門学生となり、結果、学業に時間を奪われたわけです。

決して、SDガンダム最新作や第2次スパロボZを攻略していたわけではありません!!

決してそのような事は……

(犬さんがロクアウトしました。)

第8話「合同演習・後編」

side・黒川

演習終了後、強化服から軍服に着替えて髪を整える。

一応は公の場。身だしなみを整えなければ軽く見られてしまう。

「伊隅少尉か、どうした。」

「少佐、ひどいですよ。」

ロッカールームから出てきて早々、伊隅少尉に酷いと言われる。しかも身に覚えが無いので酷いと言われてもピンと来ない。

「主語を明確にしろ。」

とりあえず尋ねてみると、半泣き状態で詰め寄られる。

「どうしてさつき僕を蹴ったんですか!？」

「被弾しそうだったから。」

ハッキリと言い切る。

あの状況下、被弾するよりは蹴り飛ばして被弾させない方が効率は良い。

まあ、それで脳震盪を起こせば意味無いだろうが。

「あの後、管制ユニット内が天地が逆だったんですよ!！」

「それは済まない。だが、伊隅少尉。君も慢心していたのが原因なのは分かっているな。」

とりあえず彼女の言い分は認めながら、釘を刺す所は刺しておく。

「そ、それは……。」

「勝利に奢れるのはいいが、慢心はするな。いいな。」

「……はい。」

……少し怒り過ぎたか。

一応はそこまで激しく怒っていないが、少し心配だな。

「だが的確に指示に従っていたところは立派だ。今後も励めよ。」

「あ、了解。」

激励はしておいたが、効果は分らない。

人の心とは難しいものだ。

特に女性は。

「少尉、いつもの席に。」

「あ、はい。」

「総員起立、敬礼。」

八神の号令で敬礼をする。俺はそれに手で着席を指示する。

「総員着席。」

「さて、今日のご苦勞様。良い経験になったと思うが、それは後回しだ。

まず大咲大尉、八神大尉。」

「「はい。」」

二人とも丁寧にも起立する。

そこまでしなくても等と内心、思いながら口を開く。

「小隊長としての立場から見ても、彼女達の腕はどうだ。」

「シュミレーターでの訓練で鍛えられていますので、実戦には耐えられます。」

「しかし、実際の経験が少な過ぎるのが難点ですね。」

やはり実機での経験が不足しているか。

今度、シュミレーターのデータを弄くって奇襲からの出撃でも造ってみるか。

あるいは……。

「虎の穴にでも放り込むか？」

「後藤副司令に敬礼。」

ほぼ反射的に号令と敬礼を同時にする。
全員起立し敬礼する。

「おう。楽にしてくれ。」

「総員着席。」

号令をかけて再び座り直させる。

俺は立ったままだが。

「副司令から何かありますか？」

「そうだな……黒川少佐、赤点だな。」

手厳しいが、伊隅少尉たちの一件を含めれば妥当か。

「そうですね。今回は否定できません。」

「予測はしていた？」

「一応は。」

頷き答える。

すると副司令は変わらず俺を見ている。

「なら問題点は直せるな。」

「一ヶ月中には。」

早急にプログラムを発注しなとな。

大見得を切った以上、有言実行あるのみ。

「あとさ、1800に親睦会も兼ねて上級階級同士で飯を食うって話があるから、よろしく。」

「俺と大咲と八神とでいいですか？」

苦笑しながらも質問する。

「構わないよ。」

「所で副司令はこの後どちらに？」

「デート。横浜の海の幸を堪能しようと思ってね。」

横浜の海の幸。

だいたい誰と会うのか分かった。

まあ、数名は分からないのか疑問を浮かべているが問題ないだろう。

「了解。ついでに、白ウサギにお菓子でも買ったらどうですか？」

「うん、そうするか。」

すると副司令が佇まいを直したので俺たちもそれに習う。

「今回の演習はご苦勞様。後はこっちで処理するから一泊後、明朝出立する。以上、解散。」

すると足早に部屋から出て行く。……押しているのだろうか。

「伊隅中尉。」

「はい。」

「ここが宿泊所だ。」

俺は地図を渡す。

場所は帝都城のお膝元であり、所謂、俺の親父の実家である。

「敷地外だから事故や怪我に注意してくれ。」

「了解です、少佐。」

「我々の帰宅時間は不明だが、深夜までには戻る。」

「はい、では失礼します。」

「ああ。」

「みんな、行くよ。」

伊隅中尉の号令の下、全員出て行く。

「伊隅中尉、平和な時なら保母さんだったかな？」

「なら少佐は軍人でしょうね。」

「何故そう言い切れる？」

「単純よ。それ以外の仕事が見つからないし。」

「分かんぞ。存外、保父さんになっているかもしれないぞ。」

次の瞬間、二人が頭を抱える姿を見て、不思議に思う。

「何だ？」

「「似合いすぎる（よ）。」」
「むっ。」

自分では想像できないが、この二人はどんな想像をしたのだろうか。
……聞いてみるか。

「因みに、想像では？」

「ひよこ柄のエプロンを着て、子供達を寝かせつけている姿とか。」
「私は子供達と無邪気に遊ぶ姿ね。」

「……。」

何となく想像はできたが、今の自分とは余りにもかけ離れすぎている。

「もしもの事だ。現実には軍人で、人殺しだ。」

「でも楽しいかもね。暇つぶしには。」

「……暇つぶしも良いけど、そろそろ時間よ。」

時計は1740を刻もうとしている。

「では、行くか。」

「「了解。」」

side・沙霧

「……では、慰安も兼ねて乾杯。」
『乾杯。』

黒川少佐の音頭の元、食事会が始まる。

年齢的には20代前半から30代前半までと幅広い人間が集まっている。

その中で女性と話している黒川少佐を見つける。

「少佐、本日はご苦勞様でした。」

挨拶をすると少佐はこちらを振り返る。

さて、少し試してみるか。

「いえ大尉。我々の若い連中も肝を冷やしたでしょう。」

今日の演習は充実したものですよ。」

「いいえ。こちらこそ普段は体験できないような戦闘でした。」

「あれですか？」

私は頷いて肯定する。

「あの兵器が完成すれば戦術も広がります。」

「沙霧大尉、残念ですがあれはまたお蔵行きです。」

「ほう、それはまたどうしてですか？」

少佐との会話でこの人を引き込めるかどうかが掛かっているのだ、慎重に言葉を選ばなければ。

「……お金、足りないんですよ。」

「……は？」

待て、落ち着け。これは少佐が意図的に言っているのかもしれない。
落ち着け沙霧尚哉。落ち着いて聞け。

「それは、どう言うことで。」

「そのままの意味ですよ。幾ら多方面からの支援があるとは言え、本来貰える筈の軍からの支給は雀の涙。

特に帝国陸軍参謀本部付きの中佐からは嫌がらせも受けるし……。」

後ろで大咲大尉、八神大尉がうなずく。

「そ、それは……。」

「無い袖は触れぬ。」

「貧乏暇なし。」

「背に腹はかえられない。」

「「はあ。」」「」

……これは、地雷を踏んだか。

いや、多分ではないな。確実に踏んだなこれは。

「全く、あの中佐、怪我しないかな。」

「そうだね。特に良いのは階段から転げ落ちる。」

「それに加えて首が明後日の方向に振れば良いのに。」

何だか、少佐達から黒い物が出ている様に見える。
しかも私を残して全員が何処かへ行ってしまった。

「「くくくくく……。」」「」

……誰でも良いから、助けてくれ。

この空間は、怖すぎる。

side・?????

密室で1人の男と2人の女が密会していた。
無論、これはそれほど色っぽい物ではない事は3人とも承知している。

「で、あなたの情報つてのは？」

「こつちの商品は部隊の練度の向上と新型機。」

そつちの商品は例の計画の遂行と例の物10kg程かな。」

「高いわ。もう少し安くしなさい。」

男は苦そうな顔を作る。

「妥協だよ、人生は。そもそも何故妥協が必要かと言うと……。」

「無駄話は止しなさい。あなたの御託聞いてる暇はないの。」

バツサリと切り捨てられた。

「酷いな。兎にも角にも新型機には新商品を二点もつけるんだよ。
相場的にはこつちが損するんだよ。」

「知ったことじゃないわ。」

「ですよ〜。」

「……じゃあさ、害虫に対する面白い情報をあげるよ。」

「へえ、どんなのかしら？」

「これだよ。」

男は懐から1枚のCDケースを取り出す。

「無料体験版だからね。中身は軽いよ。」

「待ちなさい。」

女性はCDを受け取ると慣れた手つきでパソコンに読み込ませる。

...

.....

.....

突然、椅子が倒れる。

「こ、これは!？」

女性は青い顔をする。

まるで開けてはならないパンドラの箱を開けたかのような表情で。
パソコンのモニターを凝視する。

「どうだい？あれを10kgじゃ少ないくらいだよ、この情報は。」

「.....信憑性は？」

「90%。」

「90%ですって!？」

男の自身を持った答えに女性はさらに驚く。

「勿論。ソースは確かな物だし、君自身も薄々は感じてたんじゃないのかな？」

「.....。」

「さて、どうするかね、自称天才君。

この世界には君の認識を遥かに上回る物事があるのだよ。
だが、君はそれを知る権利を持った。どうする？」

毒だと分かりながらも女性は男の話に乗ることにした。
それ以外に道は無いと自身に言い聞かせながら。

「……分かったわ。10kg譲渡するわ。」

「交渉成立だね。さてウサギちゃん、人参だよ。」

男は少女に袋を渡す。

「……人参、嫌いです。」

「ははは。そうかい。」

ま、近々、家の白兔達と何時かは合わせてあげるよ。」

「はい……。」

「さて、と。」

男が立ち上がる。

「では私はお暇させてもらうつよ。」

「……もし、世界に機械仕掛けの神が居るとしたら、あなたはどうか思う？」

「そうだな、そいつにこう言ってやるよ。」

『この戦争は人間と糞虫との戦争だ。手前らは首を突っ込んでくるな！！』

とね。」

女性の不意な質問にも男はいつも通りの作った表情で答える。

男が出て行った後、女性はコーヒーマドキを一口。

「後藤、あんたは何処に進みたいの？」

女性く香月夕子くの問いに答えるものは誰も居なかった。

第8話「合同演習・後編」（後書き）

駄文率とグダグダ率が上昇中。

しかも止めれない。

……ボダブルも戦国大戦もお預け。

第2次スパロボZ再世編、早く出ないかな。

あと、個人的にマルグリットさんが可愛く感じる。

……リアルに忙しい。どうしよう。

第9話「九月六日」(前書き)

放置してすみません

理由は単純にスランプです。

ここからどんがめですが、未永くお付き合い下さい。

第9話「九月六日」

1993年9月6日

side・黒川（過去）

「ふう。」

俺は支給された77式戦術歩行戦闘機『撃震』で作戦開始を待っていた。

周囲には統一中華戦線の『殲撃8型』が複数存在している。系統こそF-4シリーズの発展型だが、フォルムは少しスマートな感じがする。

俺以外の戦術機は米軍の払い下げのF-5『フリーダムファイター』が3機。

いずれも俺の部下が乗っている。

しかし、目立つな俺達の戦術機は。

ま、外様だからしょうがないか。

「フーガ01より全機へ、状況報告。」

通信回線を開き、各機の返答を待つ。

「フーガ02、異常なし。静か過ぎて怖いくらいよ。」

「フーガ03、異常なし。フーガ02と同じ感想です。」

「フーガ04、異常は見当たらず。前線部隊が気になるな。」

大咲、八神、西島、三人から返事が帰ってくる。

よし。

「フーガ01よりオールフーガへ。今回の作戦を再確認する。作戦は大連に向かう大規模BETA群の殲滅を目的とした中韓連合軍の要撃作戦のお手伝いだ。」

索敵は手を抜かずに行え。全ての索敵情報を逐一確認し、異常があれば直ぐに本部へ繋げ。

……ま、大陸派遣軍も側面支援として参戦しているから、出番はないだろうがな。」

『『『了解。』』』

「ふう。」

通信を切ると自然とため息が出てしまう。

後方とは言え、本部前を警護することになった俺達。

正直、責任と重圧で潰れそうだ。

すると、通信が入る。しかも個人回線。

回線は……フーガ02、大咲か。

「どうしたフーガ02、個人回線の使用は禁じられているぞ。」

『問題ないわ。相談だからね。』

「ったく。用件は何だ？」

『もし敵に襲撃され、本部破棄となった場合の撤退路の確認よ。』

「撤退はハルピン、部隊合流もそこで行う。」

戦術機の破棄は厳禁とする。以上だ。」

『了解。』

通信を切る。

しかし、どうにもこうにも初陣とは緊張するな。

「緊張しすぎだぞ、黒川敏行。指揮官として恥ずかしくない振る舞

いをしろ。」

『03より01へ。』

唐突に通信が入る。

03だから、八神か。

「どうした、03?」

『緊張してるのは分かるけど、通信は切っておきなさい。みんなに聞こえてるわ。』

「あつ。」

俺は迂闊にも通信回線を開いたまま独り言を言っていたらしい。
羞恥心から顔が赤くなる。

「01よりCP、失礼しました。」

『CPよりフーガ01、気にしてないわ。新兵には良くあることだから。』

「01了解。」

恥ずかしかった。

しかもCPは慣れているな。

やはり、日常茶飯事なのか?

少しして、電子音が鳴る。始まったか。

「作戦開始だ。」

『いよいよね。』

『成功を。』

『頼むぞ、前線。』

各自が思い思いの言葉を連ねる。

開始からどれくらい経つたろう、俺はある種の悪寒を感じる。

「……っ。」

何だ、この感じは。

何か、嫌な予感がする。

「フーガ01よりオールフーガ、全兵器使用自由。」

通信が開き、04の西島が驚いた表情で映し出される。

「フーガ04よりフーガ01、どうした？」

「嫌な予感がする。責任は持つから準備しとけ。」

俺は端的に言うとか何を理解したのか全員が頷く。

「02、了解。」

「03、了解。」

「04、了解。」

さて、外れるか。当たるか。

刹那、振動が足元から起きる。

これは、まさか!?

「っ、全機、緊急跳躍！！後方に下がれ！！」

全機が跳躍したかと思ったが、04が遅れた。

「04、直下だ！！」

『くっそお！！』

その瞬間、地下から夥しい量のBETAが湧き出てくる。

「西島、逃げろ！！」

『う、うわああああ！！！！』

西島が錯乱して周囲に射撃をする。

そして、要撃級が鋭い衝角で西島の機体を決る。

「西島！！」

爆散する西島機。

先まで普通に話していたのに、死んだ。

「っ、大咲！八神！フォーメーションを崩すな、死ぬぞ！！」

コールサインではなく、名前で直接呼びかけてみる。

だが、返ってきたのは返事ではなく、叫び声だった。

『いやああああ！！』

『こ、来ないで！！』

大咲と八神は正面へ87式突撃砲の36mm突撃機関砲を乱射している。

36mmに装填されているHVAP弾（劣化ウラン貫通芯入り高速徹甲弾）が小型種を挽き肉にし、要撃級を蜂の巣にしていくな。だが、無駄が余りにも多すぎる

「落ち着け！無駄玉を撃つな！訓練を思い出せ！」

俺は撃震の36mmで弾幕を張り、要撃級や戦車級を掃討していく。少して冷静さを取り戻したのか、二人の射撃が止む。

『……ごめん。』

『……大丈夫よ。』

そして、返事が返ってくる。

「友軍と連携を取りつつ、司令部の援護を行うぞ――！」

『了解――！』

だが奇襲で多数の部隊が混乱しているのか、思うように動けていないらしい。

実際、俺達も完全に立ち直れて居ない。

「この――！」

俺は友軍の戦車に取り付こうとしていた戦車級を36mm2門で掃討していく。

『すまない、助かった。』

「お礼は後で。今は生き残ることだけを考えて。」

『了解した。』

戦車が後退していく。

俺は確実に、そして正確に小型種と要撃級を駆逐していく。
今はまだ要塞級や光線級が存在していないが、警戒は解かないでおく。

だが、それとは関係無しにBETAは地中からまだ湧き出てくる。
その数は無限にも思えた。

『劣化ウラン弾の晚餐よ、沢山食べなさい。』

大咲も4門の36mmによる一斉掃射で小型種を挽き肉にし、要撃級を蜂の巣にしていくな。

『突撃級を排除します。』

八神は87式突撃砲を器用に使い、正確に突撃級の足のみを狙撃し、行動不能にしていくな。

「02、チェックシックス。」

『っ。』

『01、チェックエイト。』

「了解。」

各自が離れすぎないように意識しながら戦闘をする。

『そろそろ、戦場でよく会うお友達とは別れたいですね。』

『そうね。白いサソリは無理でも赤いゴキブリとはお別れしたいわ。』

「いや、せめて突撃級の殻が36mmでも簡単に貫けたら良いのにな。」

余裕が出てきたので、愚痴りあいながらも確実に敵を撃破していく。

「02、03、司令部要員の後退の援護を。」

『了解。』

俺は襲われそうな車両を助ける為に機体を走らせる。

刹那、激しい振動が機体を襲う。

「がはっ!？」

背中を強打し、肺の空気が一気に出る。

意識が朦朧として何が起きているのか分からない。

「な、んだ。」

分からない。

だがその瞬間、撃震に何かが張り付いてくる。

これは……。

バリバリバリバリ……

機体が食われる音。

投影に映し出されたのは赤い、化け物。

戦車級が取り付いた……。

「う、うわああああ!!!!!!」

戦車級だ。戦車級、戦車級、戦車級……。

俺の脳内で自分が無残に食い散らかされるビジョンが映る。

必死に操縦桿を動かすが、反応しない。

「た、たすけてくれ！！し、しにたくない！！しにたくないよ！！」

怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い怖い怖い怖い怖い！！
死にたくない、死にたくないよ！！

『剥がれる！！』

『剥がれない。』

とうとう一匹が撃震のハッチを噛み砕いた。

赤い化け物が、口を開いている。

「死にたくないんだ、誰でもいいから助けてくれ！！」

その刹那、金属を砕く音が止む。

『しっかりして。』

「お、おお、さき……？」

自分の身体を見ている。どこも食われていない。

『死んでないでしょう。立ち上がって。まだ来てるわよ。』

「やがみ？」

過呼吸が止まらない。

落ち着け落ち着け、と心の中で唱える。

少しして、落ち着いた俺は慌てて撃震を起こし、チェックをする。

【・左腕部損失

- ・管制ユニット破損
- ・装甲の一部が損失
- ・跳躍ユニット異常なし
- ・各部関節異常なし
- ・稼働率48%】

厳しい数字だが、まだやれる。

「おおむね大丈夫だ。」

俺は再び右腕だけだが87式を構えて、36mmのトリガーを引き、撃つ。

しかし物量が圧倒的過ぎる。
まさしく数の暴力だな。

『01、後退命令が出たよ。ハルピンまで後退しよう。』

周囲を確認すると、確かに車両やらがわらわら動いている。
だが、このままじゃ危ないな。

「02、報告感謝。03、遅滞戦闘をしながら友軍の殿を勤めるぞ。」

『03より01、機体の損傷度から遅滞戦闘は不可能と思われる。』

八神が冷静だが心配した口調で言うてくる。

「不可能じゃない。それに、足の遅い戦車やトラックを優先的に逃がさないとな。」

ふと、右に殲撃8型の大隊を確認する。

頼んでみるか。

「その戦術機大隊、友軍撤退の支援を協力してくれ。戦車や非戦闘員を逃がす。

大丈夫なら帝国軍の通信回線を開いてくれ。」

少しして、通信回線が開かれる。

外見からは20代後半の男性が映る。

『第133大隊の李大尉だ。了解した。撤退の援護を行う。』

そう言うのと複数の殲撃8型が掃射を始める。
しかし大尉か。なら口調を改めないとな。

「帝国軍大陸派遣軍、多目的戦術運用準備会所属、黒川中尉です。協力、ありがとうございます。」

『しかしその戦術機で大丈夫か？大破寸前に見えるが。』

やっぱり言われたか。

だが、ま、しょうがないか。

「跳躍ユニットは無事ですから撤退には問題ありません。

それよりも今は足の遅い戦車部隊の撤退を援護しましょう。

車両はともかく戦車は遅いですから、戦術機で遅滞戦闘を行いましよう。」

『分かった、中尉。』

そう言うのと大尉達の部隊は戦車部隊の護衛として同行していく。

ふむ、部隊数も多いな。

しかし、そろそろ、か。

「俺達も撤退だ。このままハルピンまで下がるぞ。」

近づく戦車級を掃討しながら撤退準備をする。

どうやら第133大隊が殿を務めてくれるらしいな。

『了解。……負けたんだよね。』

悔しそうに言う大咲。

しょうがないか。初陣での敗北は流石に堪えるな。
だが、このままでは不味いな。

「負けたよ。けど、生きているんだ。次がある。」
『次？』

不思議そうに八神が尋ねてくる。

「死ねば仏だ。生きていれば反撃も出来る。」
『でも、情けないね。』
「知ったことか。」

大咲もまだ弱いな。

ま、それは俺もだが、少しばかり言っておくか。

「俺は汚泥を嚼り、土を食ってでも生きる。
英雄的な死より泥臭い生を選ぶぞ。
死ねばそこまで。何も出来なくなるからな。」

例え嫌われていても帰りを待っているあの子の為にも、俺は生きる。

「だからお前らも生きて帰れ。生きて帰って敵の脅威と成り続ける。

」
『分かった。』 『了解。』

俺は西島の事が頭に浮かぶ。

性格は真面目で人当たりも良く、優秀な奴だった。

故郷に弟と妹が居ると言っていた。

それなのに、俺のミスがあいつを殺した。

「このままじゃ済まさんぞ、BETA。」

操縦桿を強く握り、己の不甲斐無さに怒る。

第9話「九月六日」（後書き）

気付いたら

PV 46,684 アクセス

ユニーク 11,806 人

本当にありがたいです。

こんなでも見てくれる人が居るのは嬉しいです。
さて、頑張りますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7931o/>

MUV-LUV ALTERNATIVE ACE

2011年9月15日03時24分発行